発表要旨

房総の山のフィールド・ミュージアム事業について

千葉県立中央博物館上席研究員　尾　崎　煙　雄

・千葉県立中央博物館について

当館は平成元年に開館した総合博物館で、房総の自然誌と歴史をテーマとしています。本館の隣接地には野外博物館としての生態園があり、さらに分館海の博物館（勝浦市）、大利根分館（香取市）、大多喜城分館（大多喜町）の３つの分館があります。常勤職員74名のうち研究職は61名に上ります。

・房総の山のフィールド・ミュージアム事業

当館の事業は多岐にわたりますが、今回は「房総の山のフィールド・ミュージアム事業」（以下、「山のＦＭ事業」）について紹介します。千葉県は三方を海に囲まれた房総半島に位置しており、半島の南部は低標高ながら山地を成しています。この山地は房総丘陵と呼ばれ、森林に覆われたその一帯は宇宙から見ればまるで「緑の島」です。

この房総丘陵を舞台に、山のＦＭ事業が開始されたのは平成15年度のことです。といっても、山のどこかに博物館の建物があるわけではありません。この事業は房総丘陵の自然やそこで暮らす人たちの文化そのものを「博物館資料」と捉える博物館活動です。今年で７年目を迎え、４名の研究員が「資料収集・保存」、「調査研究」、「展示」、「教育普及」等のさまざまな事業に取り組んでいます。その性格上、山のＦＭの事業内容の多くは地域との連携の上に成り立っています。ここではそのいくつかを紹介します。

・三島小教室博物館

房総丘陵の真ん中近くにある君津市立三島小学校は全校児童40数名の小さな小学校です。この学校に間借りして開設したのが「三島小教室博物館」です。毎週金曜日に研究員が滞在し、地域の自然や文化に関する資料収集や調査研究の拠点としています。とくに昆虫やクモなどの標本収集に力を入れており、これまでに数千点に上る資料が集まりました。この資料収集に大きな力を発揮しているのが三島小の子どもたちやその保護者のみなさんです。学校や家や農地でみつけた虫を教室博物館に持ち込むのがすっかり習慣になった人も少なくありません。「博物館の先生がよろこぶから」というのがその動機になっているようです。これら地域の人たちによって採集された標本はコレクションの何割かを占め、房総丘陵の生物相の解明に大きく貢献しています。また、地域の人との共同研究の成果も上がっています。そのいくつかは学術論文として発表されました。

三島小教室博物館の活動は君津市教育委員会と連携して行っていますが、その活動が評価され、今年度は第２の教室博物館が君津市立蔵玉小学校に開設されました。

・山みち展示

山のＦＭ事業の「展示」として企画したのがこの「山みち展示」です。清和県民の森と連携し、その遊歩道の一部に約1.5キロのコースを設定しました。そして、その山みち沿いで見られる生物や人工物を、手作りの看板を使って解説する展示です。「山の自然や文化そのものを博物館資料と捉える」という発想をそのまま野外に当てはめたわけです。きわめて素朴な手法ですが、山みち展示の真骨頂はその展示資の探索とメンテナンスのきめ細かさに

あります。担当研究員が毎週この山みちを歩き、解説看板の更新を行うと同時に新たな展示テーマを探して写真撮影や資料収集を行っています。また、季節毎に案内地図を作成して利用者に配布しています。さらに、このコースを使って年間５回程度の観察会を開催しています。

今年度中に、この山みち展示を他の場所でも展開することが決まっています。この手法は人的コストが大きいため、研究員だけでは拡大が困難だったのですが、地域のNPOとの連携でそれが可能となりました。博物館がノウハウや展示資源を提供し、展示のメンテナンスをNPOが担当することになります。NPOは地域振興の一環として取り組んでいます。このような地域と博物館の連携なしには広大な山のフィールド全体を博物館にするという野望は達成できないでしょう。

・おばあちゃんの畑プロジェクト

房総丘陵は農業用水の確保が難しいため稲作には適しておらず、かつての農業は畑作中心でした。山間の畑で育てられてきた作物は、自家採種によって世代を重ねることで風土に適した形質を獲得し、地域の食文化と相互に影響を与えあいながら地域特有の作物となりました。また、タネの自家採種の方法、農具の使い方や作り方、施肥の方法、収量をあげる工夫など、「畑」には地域の大切な文化がつまっているのです。このような「畑」を、「おばあちゃんの畑」と名付け、平成20年度に「おばあちゃんの畑プロジェクト」を始めました。

このプロジェクトは文字通り地域のおばあちゃん達（おじいちゃんも）が中心的な役割を果たしています。博物館としては、畑作に関連する民俗の調査研究や資料収集をすることがおもな目的です。また、地域の小学校にも「おばあちゃんの畑」を作り、授業の一環として活用されています。このように、このプロジェクトには多様な人たちが参加し、地域の物語がつまった畑をそれぞれの視点から調べ、その成果を共有し、まとめ、発信する事を通して、新しい地域文化の創造を目指しています。11月には、関係者が実行委員会を組織して「おばあちゃんの畑」プロジェクト収穫祭2009の開催を計画しています。

・房総の山のフィールド・ミュージアム事業における地域連携の考え方

すでに述べたように、山のＦＭ事業においては地域連携が前提条件です。博物館が地域に対してサービスできるのは、房総の山の自然や文化に親しみ学ぶ機会を提供することです。また、これが地域振興に結びつくよう努力しています。さらにこのとき「博物館が地域にできること」と同時に重要なのが「地域が博物館にできること」という視点です。博物館は地域に対して一方的にサービスをする存在ではなく、地域から博物館へのサービスというベクトルがなければ博物館活動が成り立たないからです。このとき、地域から博物館が受けるサービスとは、地域の自然誌や文化に関する「資料収集・保存」と「調査研究」への協力です。これこそが博物館でなければできない役割であり、また、博物館が提供するサービスの根源でもあるからです。ここで紹介した山のＦＭの各事業はすべてこの点で一貫しています。このような互恵的関係の環が成立したとき、そこに浮かび上がってくるものこそが「地域の魅力」なのだと考えています。

発言録

房総の山のフィールド・ミュージアム事業について

千葉県立中央博物館上席研究員　尾　崎　煙　雄

こんにちは。よろしくお願いします。

ただいまご紹介いただきました、尾崎煙雄です。こうやってお話をするときに、よく「何かご質問はありませんか?」と聞くと、真っ先に「名前はなんて読むのですか?」と聞かれます。「けむりお」です。

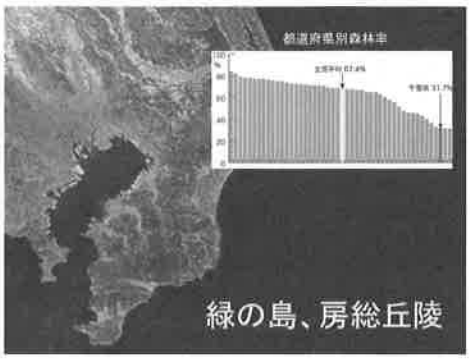
今日は、千葉の中央博物館の代表としてお話することになりましたけれども、ご存知のとおり、当館はいろいろな事業をやっています。そのなかで、ほんの小さな事業の一つにすぎないのが、このフィールドミュージアムなんですが、地域との連携という今日の話題にふさわしいということで選ばれました。

今日は、その「房総の山のフィールド・ミュージアム事業」についてお話させていただきます。

もうすでにいろいろなお話があったとおり、千葉県立中央博物館でも、動物や植物、また人文系のすべての分野にわたって、地域の人達と連携して資料を収集し、調査を進めています。まあ、そういったものとは、ちょっと毛色の違った地域連携事業として、取り上げます。

まず、房総丘陵という地域について、イメージを持っていただいた後、「山のフィールド・ミュージアム」の内容についてお話をして、その事業の中身のうち、レジュメにも書きましたけれども、特徴的な取り組みを３つほど紹介して、最後に地域連携について我々が考えていることをお話したいと思います。

まず、房総丘陵ですね。これは、関東地方の地形図で、標高によって塗り分けています。白いところは、ほとんど平地です。皆さん、千葉県がどこにあるかということはおわかりかと思いますけれども、いかに平らかがわかると思います。先ほどのお話の神奈川県では、西の方にいくと高い山がありまして、それに比べて、千葉県の南の方標高200m以上の山がこれだけしかない。都道府県の最高峰と並べてみると、富士山を筆頭に、だいたい1000mクラスの山がある。千葉県は、最高峰は愛宕山408mですね。日本一低いです。千葉県は、山がないと思われているし、実際高い山はない。そんなところで、わざわざ山のフィールドミュージアムをする。



これが衛星写真で見た千葉県ですが、大雑把に言って、下半分がほとんど緑に覆われていて、上半分は何か汚れたような色になっているのがわかります。この緑色は、森林なんですけれども、都道府県別の森林率と言いますと、こんなグラフになります。国土の３分の２は森林。千葉県はどうかというと、下から３番目。３割しか森林がないんですね。森林が非常に乏しい県なんです。その乏しい森林のなかにあるのが、房総丘陵。我々は、「緑の島、房総丘陵」と言っているんですけれども、この緑色の濃い部分が「房総丘陵」です。

これは、千葉県の人口密度の分布を説明したものですけれども、赤く塗ったところは、１平方キロのうち1000人以上で、黄色のところは、100～1000の間。緑色のところは、100人未満。もう一見してわかりますけれども、房総丘陵というのは人が少ない。それと比べまして、左上の方、千葉市など県の北西部は人口密集地になっている。黄色の部分は農村地帯で、大体これが日本で平均的な人口密度になります。100人未満というと、例えて言えばブラジルぐらいの密度になります。

その代わりに誰がいるかというと、こういう人達がいます。ニホンザル、シカ、イノシシがいます。大雑把にいって、サル、シカ、イノシシの頭数を合わせると、1万は超えるんですけれども、ほぼこの地域に住んでいる人と同じか、むしろ多いぐらいなんですね。

これで、駆け足で房総丘陵というところのイメージを持っていただいたので、博物館の話をしようと思います。

千葉県には、県立博物館がたくさんありまして、7館10施設あったんですが、ちょっと減りまして、今は5館8施設です。赤の点で示したのは、中央博物館と、中央博物館の分館。左下緑色で示してあるのが、大雑把な房総丘陵の地域で、そこに房総の山の一帯をフィールドとして、事業を展開しています。

この事業の特徴は、まず房総の山の自然や文化を守り育む。そして、フィールドの自然・文化すべてを資料として、地域の人々やNPOと連携する。こういった特徴があります。

そもそも、こんなフィールドミュージアム事業をつくろう、とゼロから計画して始めたわけではありません。それに先立ついろいろな経緯があって、このフィールドミュージアム事業が発足しています。これは、中央博物館全体の基本構想で、昭和59年にできていますけれども、そこからどういうふうに中央博物館を展開していくか、ということを示した概念図です。一番上の赤いラインが中央博物館本館です。平成元年に開館しました。生態園は、平成7年に全面オープン。で、最初の基本構想から、「海の分館」・「山の分館」という二つの分館をつくるという構想があったわけですね。これが、海の分館。名前は、「分館海の博物館」となりましたが、平成11年に実現して、現在活発に活動しています。でも、山の分館の方は、結局まだできていないです。これは、県の財政事情などいろいろ背景があるのですけれども、実現しなかった。ただ、平成7年度には、私を含め準備スタッフが採用されて、いよいよつくるぞという体制が整えられました。この間私たちは山の分館をつくるべく、房総丘陵に入って、資料の収集ですとか、調査研究ですとか、いろいろなことをやって準備をしてきたんですが、なかなか…。まぁ、箱ができなくても博物館を始めていいんじゃないか、というのが、このフィールドミュージアムを始めることになった経緯です。そんな経緯があって、平成15年に「房総の山のフィールド・ミュージアム」という長い名前ですが、事業を開始しました。

我々もこの事業をやるにあたって、ある程度年数を切って、仕事を進めました。第1期、平成15年から17年までの3年間は、とりあえずフィールドミュージアムの骨格づくりを、その後第2期として21年度までに、中身を充実させる。そして、来年度以降、第3期として、次なる課題をやっていこうと、今その準備をしているところです。大雑把にいって、こういう流れで進んでいます。今年は、この事業を始めて7年目になります。

これから、この事業の内容を駆け足で見ていこうと思います。こんなことやってるんだ、というイメージだけもっていただければいいと思います。事業を進めるにあたって、5つの柱で事業を整理しています。1つ目が「資料収集・整理保存」、2が「調査研究」、3が「展示」、そして「教育普及」、最後に「ネットワーク」の5本柱でやっています。

まずは、資料収集なんですけれども、博物館の基本中の基本。こんな内容でやっています。

「三島小教室博物館」。ちょっと耳慣れない言葉かと思いますが、これは後でゆっくり説明したいと思いますけれども、ここを拠点として、資料収集と整理を行っています。

それから、蔵玉小学校教室博物館を今年度新設しました。「山の宝物地図プロジェクト」というのが平成18年にスタートしました。これについては、今日は詳しくお話ししません。

で、調査研究ですけれども、私たち「山のフィールド・ミュージアム事業」は、4人の研究員でやっています。それぞれの専門分野で、私が生物、ほかに地質、民俗、地理を専門とする4人のスタッフでやっています。調査研究の内容は、この下にいろいろ書かれてありますけれども、自然誌の基礎的な調査。自然と人との関わりに関する研究、生物多様性、外来種、保全生

物の総合管理などのテーマで、それぞれの専門性に応じた多岐にわたる研究を行っています。

展示もやっています。これも、一番上の「自然観察路山みち展示」という名前をつけましたけれども、これは後で詳しく紹介しますが、こういう展示をやっている。そのほかに、公民館などへの出張博物館もやっています。

教育普及事業については、これは「山の学校」と名づけていますけれども、観察会・見学会で、年間20回程度やっています。それから、「おばあちゃんの畑プロジェクト」。これも、後でゆっくり説明します。

これが、「山の学校」と題する観察会ですが、動植物、きのこ、地質、民俗芸能、地域のお祭など、いろいろなテーマの観察会をやっています。

私たちは、建物のない博物館活動をやっていますので、広報には比較的力を注いでいます。つまり、広報をちゃんとしないと、そこにいることがわからなくなってしまう。我々が活動していることをわかってもらうために、広報にはかなり力を入れてやっています。ニュースレター「しいむじな」という4ページの冊子を年間4回発行しています。5,000部ほどつくって、地域には各戸配布して、かなり手厚く広報しています。ウェブサイト、メールマガジンなど、インターネットもかなり活用しています。

最後にネットワーク。これは、今日の連携、地域連携というところとかなり重なるのですけれども、私たち、房総丘陵というところで、しかも建物をもたずに博物館活動をやっているわけですので、当然のことながら、地域のいろんな人達、いろんな施設、いろんな機関と連携しないと仕事になりません。で、これまでに連携してきた対象をざっと列挙してみますと、これだけあります。全部読み上げることはしませんけれども、小中学校、保育園、幼稚園、大学、NPO、少年自然の家、公民館、県民の森、自治体、そして博物館ですね。いろんな主体の違うところと連携をしている。当然ここには挙がってきていませんけれども、個人の方もたくさん入っていまして、これが私たちのネットワークです。

これは、今言ったネットワークの成果の一つの表示ですけれども、田舎の山のなかで活動しているわりには、案外広がりがあったかなと思います。平成17年度だけ突出して多いのですが、これはこの年に高校総体がありまして、それで多いのですけれども、それを除けば比較的順調に伸びてきていて、最近では4000人程度の人達にさまざまな形で利用してもらっているのがわかるかと思います。

ここまで駆け足で見てきたんですけれども、3つの取り組みを具体的にご紹介します。

「三島小教室博物館」というのがあるんですけれども、これは君津市立三島小学校と連携して、資料収集・整理・保存、調査研究活動をしています。小学校の空き教室を借りて、居候ですね。居候して、毎週金曜日に開館して、年間50日以上開いている。これが、非常に好評なので、今年度からはもう一つ、蔵玉小学校というところにも、教室博物館を開設いたしました。

これが、房総丘陵の衛星写真ですけれども、このマークしてある点は、すべて小学校です。ここにぽっかり小学校のない空白地帯があるかと思います。なぜないかというと、人が住んでいないからなんですが、その中心部に近いところに、三島小学校があります。もう一つの小学校は、ここです。房総丘陵の一番奥深いところを選んで、私たちは居候させてもらっています。

これが三島小学校の木造の校舎です。この隣に鉄筋の新しい校舎があるんですが、私たちはこの古い校舎をお借りしています。こういう部屋を借りて、机といすを置いてやっています。で、私たちはそこで何をやっているのかというと、主にその地域の資料収集をやっています。

私について言えば、主に昆虫を集めて昆虫標本をつくるという仕事をしています。ここで、虫の標本をつくっていると、子どもたちや保護者の方々が珍しがって見に来るんですね。そのうち、「虫を捕まえた」といって持ってくるようになります。「イタチを拾った」といって持ってきたり、カワセミを持ってきたり、シカの骨の標本だったり、いろんなものが持ちこまれます。

そういうのを加えて、その場所で標本化して、整理する、という作業を行っています。

必要に応じて、展示をしたりもしています。

今言ったのは、生き物ばっかりの話でしたが、例えば地域のお年寄りたちが来て、昔の古い写真を持ってきて、話しをしてくれたり、そういう窓口にもなっています。

これ最近の話題ですけれども、これはワスレナグモという極めて珍しいクモで、これが三島小学校で見つかりました。子どもが見つけました。地面にこんな巣穴を掘って、地面に隠れて暮らしています。こんな巣穴を見つけて調査する。これは、発見した子どもたちと一緒に調査をします。極めて珍しいクモなものですから、立派な研究テーマになる。今、この発見した子どもと私とで共同研究していて、近々論文に出される予定ですけれども、そんな調査研究もここで行っています。

次に「山みち展示」です。これは、自然そのものを資料と考えるというコンセプトから、それを展示にそのまま置きかえた展示手法です。清和県民の森というところと連携して、山道沿いに解説看板を設置して、担当研究員が毎週展示更新をしています。今年度からは、地元NPOと連携して、別の鹿野山という山にこの展示をつくろうというふうに展開しています。これがその山みち展示の地図です。スタート地点には、こうした案内の掲示板があります。

こんな手作りのＡ３カラーでプリントしてパウチしたものを設置しています。要所要所、見せたい場所にこういう看板を立てたりしています。一年中やっています。蜂の巣があると、それを展示として見せようとします。もちろん危険な場合は、撤去したり、除去したりするんですが、危険でないものについては、展示物なんですね。

これは、「森のエビフライ」という人気の展示です。リスが松ボックリを食べたカスなのですけれども、エビフライに似ているので、そのように紹介している。

これも、そういうふうに言われないとわからないものを展示によって見せています。

どういう過程で、展示をつくるかということの一例を紹介しますと、９月のはじめごろ、コナラという木のどんぐりに葉っぱがついたものがよく落ちているのですが、「これはなんだ?」とよく聞かれるんです。これだけ見ても、よくわからないのですが、裏をみると、ハイイロチョッキリ、この虫がどんぐりに卵を産みつけて、枝を噛み切って落としたものがさっきの写真のもの。こういった資料があるからこそできるんですけれども、そういった素材を組み合わせて、先ほどの看板ができあがる、ということになります。

で、もう一ケ所新たに展開しようといる鹿野山です。鹿野山の方では、鹿野山の地元のNPOの方が主体となってやっていくことになっています。この展示のノウハウや展示の内容についての具体的な資料や知識を我々が提供するという形で、今プランが進んでいるところです。この展示手法はすごくチープでお金がかかっていないですけれども、マンパワーはものすごくかかるんですね。毎週行って、展示を更新したり、壊れたものはないか、季節外れになってしまっているものはないか、といったことに常に目を光らせていなければならないので、そういう部分をNPOの人にやっていただくということになります。

最後に、「おばあちゃんの畑プロジェクト」です。これは、昨年度の文化庁の芸術拠点形成事業としても位置づけられたものですけれども、今年度も続いています。これは、①「おばあちゃんの畑」を調べる、②「おばあちゃんの畑」をつくる、③「おばあちゃんの畑」を発信する、という３つの柱で組み立てた事業です。そもそも、自家採集種子の調査と収集がきっかけになったものです。

これは、カボチャです。八百屋で売っているカボチャとはちょっと違うんですけれども、地元で「シロッ

カボチャ」と言っているものです。地元で代々種をとって育てているもので、地域特産の品種です。

これは、「フリソデインゲン」というもので、やっぱり同じように地域限定の品種です。

これは、モロコシですね。雑穀類です。

こういった自家採取の種子、自分の家で種をとって代々つくっているというのは、おばあちゃんたちに聞くと、実は多くでてきます。それをこうやって資料としてコレクションしている。

ただ、これを種子としてもっていても、それはただ種子の形をしたもののコレクションでしかないんですけれども、これを畑に植えてまた種を取らなければ意味がないんですね。

ちょっと話が飛びますが、これは、鎌です。地元、久留里という場所に鍛冶屋さんがあって、江戸時代末期ぐらいから作られてきた地域特産の鎌です。その土地の土や地質だとか、地形だとかに合わせて、鎌が存在したということで、農具の調査もあわせて行っています。

先ほど言った、集めた自家採取の種子というのは、栽培して、代々種をとっていかなければ意味がないということで、こういう畑をつくりました。休耕地、耕作放置地を借りて、畑をつくっている。あるいは、小学校の子どもたちが自分のうちのおばあちゃんに聞いて、おばあちゃんからもらった種を植えて育てている。

これが、主役のおばあちゃんです。畑で作業しているのですが、服装を見るとわかるのですが、真ん中にいるのは、おばあちゃんで、右にいるのはおじいちゃんです。で、左に写っている人は、よその人です。こういう事業をやっていると、「何かおもしろいな」ということで、よそから参加する人が出てくるということです。

この男性は、田舎に移り住んで農業を始めたいということで、どうしても勉強のために仲間に入れてくれ、ということで参加している人です。

で、こういうふうにいろんなものを収穫します。小学校の畑でも収穫します。収穫したものを脱穀したりする作業も、授業の一環としてやります。

収穫したものは、料理します。料理したものは、みんなで集まって食べます。これ、去年は「収穫祭」と題して、公民館を使ってやりました。100人弱の人達が集まって、盛大にやりました。

そのなかでは、子どもたちが授業を通じて、自分たちで調べたことを発表したりもしています。

今年も、収穫祭があります。11月22日、久留里でやります。チラシがまだできていないのですが、もし詳しくお知りになりたい方は、お声をかけてください。

今のおばあちゃんの畑の位置ですが、房総丘陵になんとなく広がりつつある、面的になってきています。

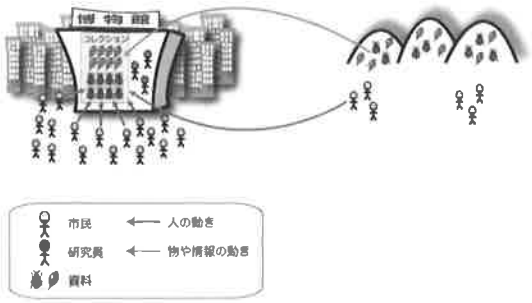
3つの事業を紹介しましたけれども、このフィールドミュージアム事業がどんな効果があったのか、ということをマンガで示したものです。これが、フィールドミュージアム以前の博物館と山の関係図で、左側が都市の真ん中に大きな博物館がある。都市には、人がたくさんいて、その人たちは博物館に来ています。右側は山で田舎なので、人は少ないです。田舎の人も、たまには町へ行って、博物館へ行ったりもしますけれども、それは数が少ないです。で、山にあるいろんな資料は採集されて、本館のコレクションとされる。山と博物館の関係は、こんな感じです。

ここに、小さい掘っ立て小屋みたいなのがありますが、これが山の小学校の教室を借りて、ここに拠点をつくります。まさに、私たち研究員が山に行きます。

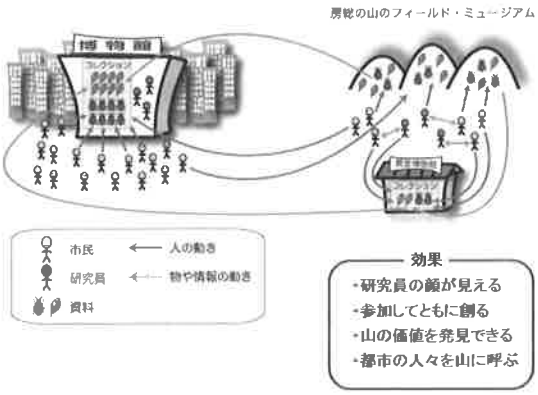
そうすると、山に住んでいる人達と関係ができます。まず、研究員の顔が見える関係になります。いろんな資料収集に参加したり、いろんなことに参加すること

になりますので、地域の人は「参加して、ともに博物館をつくる」という関係になります。あとは、実は房総丘陵というところは面白いところなんだな、という価値を作ってあげて、最後にそうやって盛り上がっていると、町の人もなんか面白そうだなといって、山に来るようになる。まあ、そんなような効果がだんだん現れてきたのかな、というところです。

博物館と山の現場との関係：フィールド・ミュージアム以前



博物館と山の現場との関係：フィールド・ミュージアム以後



これでフィールドミュージアムの話は終わりです。これは、この本館の収蔵庫の写真ですけれども、この建物のなかに大きな収蔵庫がいくつかあります。私たちは、フィールド、外に出て活動しているとすごく痛感するのですけれども、この活動というのはやっぱり本館の収蔵庫があり、ここにコレクションがあるという裏づけがあって、初めて外でああやって自由に活動ができる。出ればでるほど、痛感するというのが、最近の私の感想です。

最後に、今日の本題についてまとめるとこんなことです。

「博物館が地域にできること」というお題をいただいているんですけれども、博物館は、事業を通じて、調査研究に基づいたいろんなサービスをする。これは、展示だったり。これは主に発信の機能。だけど、「地域が博物館にできること」いう逆方向のことが大事だと思っています。

それは、資料収集や調査研究で、地域の方々がさまざまなことで博物館に協力してくれる。博物館側からいうと、受信の機能がある。この発信と受信という機能がうまくかみ合って、互恵的な環、ネットワークができあがるということが、この地域連携に密着したフィールドミュージアムで一番重要なことではないかというのが、今日の私の結びです。

ありがとうございました。

発表要旨

連携から生まれる博物館事業

八千代市立郷土博物館主任学芸員　佐　藤　　誠

1　はじめに

博物館を市民により開かれた存在とするために、博物館と地域（市民・学校・他の社会教育施設）との連携の必要性が叫ばれてから久しい。八千代市立郷土博物館も、地元密着型の博物館として、地域に貢献できる博物館運営に取り組んできた。

2　大学との連携がもたらす地域へのメリット（1＋1＝3以上に）

市内には現在2校の大学があるが、日本唯一の日本伝統文化学科を持つ東京成徳大学との相性が博物館にとってすこぶる良い。担当教授と学芸員との話し合いの中で構想が膨らみ、平成15年から様々な連携事業を行ってきた。博物館単独で行える事業には、予算や人的な条件などでおのずと限界があるが、連携することの最大のメリットとして、相互に足りない分野を補えるという面がある。

雅楽体験で笙の手ほどきを受ける小学生

例えば、大学が所有する歴史資料を活用した企画展や、大学の教材を活用した講座などが実現できる。当館では、連携に協力頂いた青柳隆志教授の研究領域である「朗詠（ろうえい）」関係の資料と研究成果を、博物館の展示指導の下、連携企画展という形で実現させた。展示作業等は大学の学芸員課程の履修生が実習を兼ねて取り組む形をとった。また大学の雅楽の授業で使用している笙（しょう）や篳篥（ひちりき）、龍笛（りゅうてき）といった和楽器を市民対象の講座に活用できないかと考え、市民向けの雅楽講座を実現した。講座は今年で6回目を迎え、体験や鑑賞で130名余の市民が雅楽の世界を楽しんだ。市民への指導は、青柳教授ひとりでは対応しきれないため、教授の人材ネットワークをフルに活用し、10名の若手楽師を講師として集めることができている。また、今年度はこうした地道な活動に理解を示された元宮内庁楽部楽長、安倍季昌氏が特別講師として参加されるなど市民にとって嬉しいサプライズもあった。

広報やちよ　NO. 986　3.15

あなたも「源氏の君」に変身

郷土博物館で源氏物語体験

装束体験で広報の表紙を飾るご夫婦

この他にも、大学が所有する十二単（じゅうにひとえ）などの豊富な伝統装束を活用した日本や韓国の伝統装束体験も毎年行っている。こちらも市民に人気の連携講座の一つとして毎年話題を集め、その時の写真が市の広報紙の表紙を飾るなどしており、地域の注目度は高い。

博物館は、会場準備と広報活動等を中心に行い、講師の交通費や昼食の対応などは、大学との折半で行っている。それぞれが持つ「人・物・金（かね）」を、連携という形で活かすことにより、単独で行うことは困難であったろう魅力ある事業を実現することができた。地域市民にとっては、通常の単独の企画では実現しえない魅力ある展示・講座・講演会を享受できるという点が、最大のメリットであろう。

3　地域の市民パワーを活かす　～文化の交流拠点として～

大学のような教育組織との連携とはまた別に、地域の博物館にとって大きな味方が地元に住む地域の皆さんである。単なる見学者を超えた、博物館事業への積極的な協力者としての市民の存在は、誠に心強いものがある。

今年度の「国際博物館の日」にちなむイベントとして、当館では初めてとなる「昭和の名車大集合！！」という事業を行った。このイベントは毎年、普段は博物館に興味のない地域の方に、改めて地元博物館に注目してもらおうと言う試みである。

今年度は地元で自動車修理工場を営む杉山社長の計らいで、社長の所属する「クラシックカー倶楽部」から有志を募り、博物館に自慢の愛車で乗り付け、青空展示して下さることが決まった。博物館としては、それぞれの自動車の解説キャプションやパンフレットを作ることになった。有志の皆さんは手弁当での参加の上、当日は愛車の横で臨時解説員も引き受けて頂くという協力ぶりであった。当日はたくさんの親子連れや自動車ファンが詰めかけ、エンジンをかけてみたり、運転席に入れてもらうなど、通常の展示ではできない貴重なイベントが市民の協力によって実現できたのである。

市民の所有する往年の名車が大集合

またミュージアムコンサートでは、地元の音楽サークルやダンスサークルが同じように手弁当で参加して下さるなど、自分たちの地域の博物館を、文化の交流場所・発表場所として活用するようになってきていることは誠に喜ばしい限りである。

市民のフラダンスチームによるコンサート

以上のような経験から、地域と密着し貢献する上で大切なのは展示や講座の学術的・文化的レベルの質は決して下げることなく地域の方が気軽に、そして親しみの念を持って博物館を活用してもらえるチャンスや雰囲気を作ることではないかと考えている。それは決して受け身ではなく、博物館側から地域の皆さんに積極的に働きかけ、地元の持つ市民パワーを発掘することこそ、これからの博物館・美術館が最も求められる方向性だと感じる。

4　地域（ムラ）の歴史や文化を再認識する機会を提供する

当館の使命のひとつに、地域の歴史や伝統文化を広く市民に伝えるということがある。昭和30年代から東京のベットタウンとして爆発的に人口の増えた八千代市では、郷土の生い立ちや文化を知らない市民が大半である。そのような市民に展示や講演会などを通じて、地元の歴史や文化を伝える努力をしている訳である。

麦丸地区の奥州講の皆さん

しかし、現在もう一つ大切な、地域に対する使命があるように思える。それは、旧来より地元に住まう人々に対する、自分の地域（ムラ）に対する歴史や伝統文化を再認識してもらうという取り組みである。一昨年開催した企画展「出羽三山展」では、八千代市域に古くから残る出羽三山信仰にスポットを当てた展示であった。調査のため地元の農村部に伺っても、なぜそのような信仰が続いてきたのか、またその祭礼の所作の意味や言葉の意味は何であるのか、実際に行っている本人たちでさえわからないということが多々あった。それどころか意味もわからず行っているこの習慣を、いっそのこと無くしてしまおうという動きさえ、あちらこちらのムラで見受けられたのである。勿論、ムラの人の中には伝統的な行事に理解を示し、積極的に残していこうとする人々がいるのも事実だが、現代社会にそぐわなくなってしまったムラの文化を、無くす方向に動いている地域が圧倒的に多いのが現実である。

私はこの企画展を通して、出羽三山信仰が残るムラの人々に、このような信仰を続けてきた先祖たちの、子孫の繁栄を願う切なる祈りというものに、是非触れてほしいと考えた。特に現在30～40代の若い世代に、自分たちの先祖から綿々と受け継いできた地域の誇るべき文化というものを、見つめ直して欲しいと願わずにはいられなかった。

私たち地域の博物館・資料館は、このような現実をしっかりと受け止め、単に生涯学習としての事業を充実させるだけでなく、地域の伝統行事や信仰を保存・継続していくための、先祖の声を代弁するメッセンジャーとならなければならいと強く感じた次第である。

発言録

連携から生まれる博物館事業

八千代市立郷土博物館主任学芸員　佐　藤　　誠

ただいま紹介に預かりました八千代市郷土資料館の佐藤誠（さとうせい）です。

私の場合は八千代市立ということですから、市レベルの博物館の視点から見た「地域にできること」ということでお話させて頂きます。予算面でも人の面でも、そういう点ではたくさんの似たような環境の館がたくさんありますので、身近に感じていただける部分もあるかなと思います。

当館の簡単な紹介をしておきたいと思います。平成５年開館です。職員は館長を入れまして５名、非常勤が７名、計12名です。そのうち学芸員は今年から２名になりました。若手が一人ようやく補充されました。今まで学芸員一馬力でしたけれどもようやく２人体制になって恵まれてきたかなと思います。平成12年から千葉県の37番目の登録博物館になりまして現在に至っております。年間入館者数は約１万８千人ということです。現在、横這い傾向にあります。

当館のビジョンですが、大きな項目だけを申しあげますと、やはり郷土博物館ですので八千代市という郷土を知り、愛すための博物館になる、私たちの住んでいるこの町を愛す、そのためには市のことを知って欲しい。そういうことをまずうちの館は市民の皆さんにどんどん発信していこう。そして八千代市民ということだけではなくて日本人ということを誇りとできるように、市民の皆さんの心も育てていきましょうということを目標にしています。

２つ目として市民への奉仕を第一として、私たちは公務員ですから市民へのサーバント（奉仕者）ということで、市民へのニーズにできるだけ情報とか知識を分かち合えるべき関係になりましょうと、そのために地域の図書館・公民館・専門の大学などと連携していきましょうということになります。

３つ目は、地域の第２の学校として、それは小・中学校、高等学校、特別支援護学校の児童生徒が利用できる第２の学校としてだけではなく、生涯学習の場としての学校でもあるというそういう環境をいつも作っていきましょうということを考えています。

では報告に入ります。１つ目は大学との連携です。

大学との連携　１＋１＝無限大

八千代市には東京成徳大学という大学があります。こちらに日本伝統文化学科という日本で一つしかない伝統文化を中心に学ぶ学科があります。そことうちの博物館は非常に相性がいい。もともと学芸員実習の受け入れで青柳隆志教授が博物館にみえた時に、何かお互いに協力してできることはありませんかということで相談がありました。市の博物館はやはりお金がありません。わたし自身は「お金がないから館行事ができない」とは死んでも言いたくないんですね。金がなければ知恵があるということで、そういう点では青柳先生とは非常に息が合いまして、お互いにないものを補う形で事業をひとつ生み出して見ましょうと。青柳先生の御専門が朗詠といいまして、和歌ですね、その研究成果を共同展示という形で企画展にしました。写真はそのときのイベントです。朗詠の被講会、宮中での和歌の朗詠を再現するという触れ込みで広報を出しまして、市民の方がその展示室のなかで被講の様子をごらんになる。そういう場面です。

２つ目なんですが、大学の事業の備品で雅楽の雅楽器がたくさんある。学生に使っているだけではもった

いないので、これもなにか地域の皆さんに還元できないかどうかということで始めたのが雅楽講座、大学の備品ですので笙、龍笛、篳篥（ヒチリキ）なんていう楽器がですね20から30あるんですね。これを博物館

大学連携事業 その1　雅楽講座（笙の部）

で用意しようとしたらまず無理です。ですからこの大学の雅楽器を使いまして、私たちは広報担当と会場の提供ですね、そういったことを分担しまして、募集をかけましたところ非常に人気でした。ごらんのとおり小学生の女の子たちも参加しております。

雅楽講座　龍笛の部

龍笛ですね。こういう形でこのようにそれぞれの和楽器を体験される。最近、学校の学習指導要領が変わって日本の伝統文化を勉強しなさいということが表に出てきました。博物館にとってもこれは非常にありがたいことで、そういった背景もありまして子供たち、お母さん方、先生方の非常に注目の高い事業になっております。

このイベントをやるときの最大のネックが指導者をどうしようか、たとえば講座では40名募集をかけます。40人集まってきてそれで青柳先生一人では対応できないわけですね。ところが青柳先生の人材ネットといいましょうか、その中で雅楽をやっています人にお話をしまして、さらにその方が仲間に声をかけまして、八千代でこういう雅楽の普及をやるぞということで、若手の楽人のみなさんが10人集まってくださいました。今年で実は６年経つのですね。今年の３月まで宮内庁の式部職楽部の楽長であられた安倍季昌先生が、若手が雅楽の普及に尽力しているなら私もボランティアでいこうじゃないかと。その筋の人に聞きましたら滅多にこのような場にはお出にならない、そういうような

舞楽

方が要は若手の純粋な取り組みに心を打たれて来てくださったと、一般の方にとっても、とてもラッキイなことだったと覚えておりますね。こういう連携の中からこういういろんな人の輪が広がって、人の繋がりからびっくりするような方が無償奉仕でいらして下さる。そういうこともありました。

私たちは市民サービス第一ですから、雅楽だけではなく舞楽も鑑賞していただければということで、２人舞を舞っておりますが、指導者である楽人の皆さんの演奏をバックに舞楽も舞うという形ですね。午前と、午後の部に分かれまして鑑賞と講座、両方とも別枠で募集をかけて、今年はいずれも満員御礼という状況になっております。ですからこれも大学の備品を借りまして、そして教授の人材ネットワークを使いまして非常に成功している例ですね、本当に八千代の市民の方々もこの講座を楽しみにして、リピーターという方もたくさんいらっしゃいます。

これだけの人が関わったということで（写真の人の説明）若手のメンバーですね。プロの方はやはり予算上とても呼べません。この方たちは東京芸大で雅楽を専攻して、今一般の仕事をしている方たちが中心なんですけど、普段こういう活躍の場を欲しがってらっしゃる、プロじゃないんです、でも自分が学んだことを活かす場が欲しい、そういう彼らのニーズに合致しているということでは、うまくいったかと思います。

もう１つの大学の連携の形をご覧ください。東京成徳大学は、歴史装束を非常に山のように持っていると言うと大げさかもしれませんが、これを学生に着付け指導している。十二単などはすべて正絹です。何百万もするようなものも学生に惜しげもなく実習で使って

いる。それだけではもったいないだろうということで、市民の方々に体験してもらったらどうかと、同じように市民講座として始まりました。歴史装束、甲冑を含めて体験してもらう、これは去年の八千代市広報の表紙写真なんですけども、金婚式の記念に体験を申し込まれた。それを八千代市の広報課の方で、これはいい市のＰＲになるということで表紙を飾ったということですね（発表要旨参照）。

普段、博物館に来ない高校生世代ですね。最近、戦国武将ブームになっていてゲームソフトの主役で伊達政宗や、今、直江兼続もやってますが、こういった人たちのことを体験したいというニーズは多いんですね。

女官装束を体験する女子高生

女子高生も十二単が着れますよということで非常に注目をしています。実際に着付けをしているのが、東京成徳大の学生です。授業で履修するんですが、その生徒の活躍の場はないんですね大学内では、だけども博物館と連携することで、履修した着付けを実際に市民の方々に着させてあげられる。それで市民の方々に感謝されるんですね「うれしいありがとう」と、学んだ事を活かせる学生はとてもうれしいわけです。授業の成果を、市民に還元するという形、いい形で活かせているという状況になってきています。

履修学生が着付けを行うことで学習の成果を市民に活かす

面白いもので、こういう連携を足掛け６年やってますといろいろな情報が入ってきます。逆に、八千代市でこういう面白い連携事業をやってますという情報が流れますと、思わぬ話も舞い込んでまいります。韓国の誠信女子大学校、こちらの大学の方と連絡をとるような機会がありまして、そういう日本の歴史装束の体験をしていると、ちょうど今、折しもといいますがだいぶ前から続いておりますが韓流の時代劇ブームがありますね、いろんな時代劇で韓国のことがブームになっております。十二単とかいろいろな体験をしたかたから韓流の服も着れないだろうかと、一般の方からの要望ですね、生の声が出てくるんです。誠信女子大学校の先生と話をしまして、スポンサーが東京成徳大学にきまり、韓服を作ったら大学の備品にしてもらいますということで、ダブル連携ということになりました。韓国の方へ装束をオーダをして、誠信女子大学が歴史的な検証をして、正しいもの、資料化した装束を作りまして、それを東京成徳大学が研究用備品としまして、こんどそれを韓国の歴史装束体験という形で事業化したものです。

韓服を体験する子ども達

ほんとにちっちゃい子供たちから、おかあさん、いろんな方たちが、毎年、募集をかけるとたくさん参加しにやってまいります。さらにそのうわさが広まりますと派生事業が生まれるんですね。日本と韓国両国の琴、その演奏会が実現しました。これはまた別枠で写真の左の女性が日本の家元の方ですけれど、日本の琴を弾きまして、右側の韓国の女性が韓国のカヤグムという楽器なんですが、これを弾きまして、両国の琴の

人の輪が新たな事業を生み、様々な講座を地域に還元できる
～カヤグムの演奏～

サムルノリの公演

演奏会をやりました。最後、日本の琴と韓国の琴で同じ曲を演奏するということも実現しました。

さらに派生してやったものが、サムルノリという韓国の農村部で行われている打楽器を使った音楽があるんですが、これも上演することができました。このようにいろいろな情報網、人の繋がりで思わぬ方が私どもに協力をしてくださって、ほとんど無償に近い形で講座に協力してくださった。ですからお金に悩むということはほとんどなく、いろんないい事業を展開してきております。

ここまでは大学との連携なんですが、一番肝心な、八千代市立ですから市民の方との連携はどうなんだと、これから市民の方との協力を見ていっていただきます。市民の方、八千代市は19万人の市民の方がおりますけど、いろいろな趣味を皆さん持っておられます。そのなかで、これは国際博物館の日記念イベントでのテーマは毎年変るんですが、ある市民の方がですね、クラッシックカークラブのメンバーでして、市内に名車を持っている方がたくさんいるけども、イベントの内容としてどうだろうかと以前お話をいただきまして、それはなかなか面白いのではないかということで実現した講座です。車となりますと、やっぱり男の子ですとかお父さんが夢中になる方が多くてですね、野外でやったんですけれど、当日たくさんの親子連れですね、普段の博物館の展示ではなかなか親子連れがくるということは少ないんですが、この日は特に親子連れが目立って、また、オーナの方たちが実際に車に乗せてくれたり、解説をしてくれたりしまして、オーナの方が臨時の解説員を務めてもらったという事で、非常に盛況でした。ちなみに真ん中の赤いのがメッサーシュミットという3輪車なんですが、これなんか子供が乗ると大喜びということですね。合計10台余り集まってくださったんですが、ごく一部写っていますけど、ヨタハチとか色んな名車が写っていますけど、こういった車が博物館に来ると私たちは博物館的な仕掛けをするんです。どこにするかというと、窓に解説パネルがあると思いますけれど、その車の解説パネルは博物館サイドで作ります。実際に1日限定の自動車博物館というような形で、市民の方の協力で実現できたという経緯があります。そして市民の方たちの趣味というのはですね、車に限らず本当に広いです。

次はまた違う方たちの協力ですね、今度は音楽ですね、音楽を愛する市民の方がたくさんいらっしゃいます。ただアマチュアバンドの方たちでもなかなか発表できる機会がない、どこか会場を借りるとお金を取られるということで、そういう方々が結構いらっしゃるんですね、今、駅とか色んなところでコンサートをしますが、ミュージアムコンサートもいろいろな館でコンサートをやっていますけれど、ミュージアムコンサートの中を市民の方の発表の場としてはいかがだろうかということで、実施に声をかけて始まったのがこのコンサートですね。お気づきになったかと思うんですが、われわれが連携するときに一番のポイントになっていることが、相互にとって必ずメリットがあることということですね。これが一方通行ですと続かないんです、こちらだけ得して向こうはお疲れ様というのは絶対続かないんですね。大学は大学のネームバリューが上がるとか、学生の力が活かされるとか、市民の方も参加して楽しい、発表できてうれしい、そういった

親子連れで賑わう会場

地元カントリーバンドの公演

ことで気持ちよく参加していただいています。実際、普段はネクタイ、スーツの人たちがこの日はカーボーイハットにカーボーイブーツをつけてカントリーを弾いて皆さんで楽しそうに演奏をすると。私たちも、これは野外でやっているんですが、これは音が広がりますから騒音対策ではないんですが、皆さんもどうぞご一緒に参加ください、野外で気楽に音楽を楽しみくださいと。そうすると地元から非常にたくさんの方々、約100名以上の方々が集まるんですけれども、こうような音楽を聴きにきてくれます。私たちも少し嗜好を凝らしまして真昼間にやらずに、夏の夕方5時くらいに設定しました。普通だと閉館の時間ですが、そういう時間に黄昏時にコンサートを開きます。気がつくと市民の方が庭でビールかなんか飲んでて、そういうのを見ますと、地元の博物館が憩いの場になっていると、そういう瞬間だと思います。

時々はちょっとセミプロ級の人が、さっきのカントリーバンドの方が紹介してくれて、「こういう人もいるんだけどどうだろう」ということで、東京都認定の大道芸の方々の中の「ジプシーポット」ていう人たちなんですが、来ていただきました。

ここまでは、歌とか音楽ですが、さらにまた派生しまして、地元ダンスサークルの公演もやりました。フラダンスをやっている人口というのは相当数います。社交ダンスも入れると相当な数になってまして、やはり披露する場が欲しいということで、博物館のコンサートに参加していただいている状況ということです。

スコティシュダンスの皆さんですね。男性がスカートをはいているという特異なスタイルですが、この方たちも同じように参加したい、さらには次ですね、モンゴルダンスの方、この女性の方がモンゴルの方で八千代市にお住まいなんですね、八千代市の方にモンゴルのダンスを教えて、それを博物館でも公開してくださったということになります。こうやって市民の方の力を借りますと、次から次へと尽きることなく色んな協力者が現れてまいります。

今までは主に“動”の協力ですけど、逆に市民の方の“静”なる協力といいますと何があるかというと、こちらは市民の華道サークルによる装飾を兼ねたロビー展示ですね、こちら一週間に一回ロビーにお花を飾りにきております。ホームページで公開して、やるかたにとっても非常に好評なんですけど、博物館は基本的に市民が憩いで集える場所でもありたいと、つまりロビーにちょっと入ってきてお花なんか見ながらゆったりできるような場所でもあってもいいんじゃないかと常々思っています。専門的にいうと「資料への花粉による影響は大丈夫か」となっちゃうんですけれど、そういうところは目をつぶりまして毎週お花が変わる、そしてお花を見ながらどうぞ博物館のロビーでゆっくりしてください、というようなことに市民のかたが協力してくださる。ちなみに館庭お花も、先ほどおばあちゃんの畑というのがありましたけれど、清宮さんというおばあちゃんが清宮ガーデンというのを開いています。自分の球根を植えて市民の方に披露している。四季を通じて色んなお花を作っている。以上が市民の協力による活動です。

更には今度は地元のお寺を巻き込みました。お寺の方々皆さんいろいろお宝を持ってますね。なかなか博物館とは接点が少ないんですけれど、いろいろ調査で伺うことは多いんです。そのときにですねご住職たちに博物館の仏教関係の展示が何もなんですと、レプリカを作りたくても何百万円もするんですと常々話して、市民の方もお宅の秘仏を博物館でも見たいなとよくいわれるんですという話をしまして、それでは寺同士おなじ宗派で少しお金を工面してみようかという話になりますね。ここまでくると非常にありがたいことで話が8割完成していまして。後は展示用のレプリカを作っていただく段取りということになるんですけれど、そこまでお寺の方たちが協力していただくからには、市としても御礼をしようということで、寄贈になったら、市長さんに感謝状を渡してもらう。これはお寺の方には名誉なことなんです。普段市長さんから感謝状を頂くというのはなかなかないですよね。文化に貢献したということでお寺の株も上がったということで非常に喜ばれました。実際に作ったものはどうなったかといいますと、次の写真ですね。東京芸術大学の籔内佐斗司教授ですね、この方はご存知の方もいるかと思いますが、平城京遷都千三百年記念キャラクター「せんとくん」の生みの親です。その教授がですね、お寺の資金援助を受けて、大学の研究で受託研究という形で引き受けましょうとおっしゃって下さった。実は、通常仏像の製作、私たちの頼んだ仏像ですと普通500万ほどかかるんですね、しかし受託研究ですと大学院生が研究で仏像を作るので格別なご配慮もあり約100万でやって頂いたのです。この仏像はお寺から寄贈になり、常設展の充実も地元の人の協力でできていると

東京藝大の籔内教授（左端）が協力

いうところなんですね。これが今、常設展に展示されています。特殊な截金（きりかね）という技法がほどこされていて、非常にお金がかかるところだったんですが、東京藝術大学さんのおかげでかなり安く済みました。

では最後の報告になります。最後に私どもの博物館で申し上げたいのは、企画展示は博物館にとって資料収集と切っても切れない大事なものですね、その企画展示で私たちの心がけているのが、地元を見つめなおす、そういうきっかけ企画になるような展示でなければだめだということで、昨年やったのは「八千代と出羽三山展」です。八千代市は千葉県にありながら、出羽三山信仰のメッカでして、たくさんの出羽三山講の記念碑が建っているんですけれど、その講の皆さんが天道念仏という春に行うお祭りをやっていますが、その時の様子です。こういったことも調査をして展示をしているんですけれど、実際に地元の公会堂にお邪魔して調査という形祭道具ので製作の様子に立ち会っています。調査で何度も通ううちに自分のやっている村の伝統文化の意義が改めてわかってくるんですね、最初は何でやっているのかわからない、爺さんもやっているからおれもやっている、最近はうちの息子もやりたがらない。なんていう話をしていたんですけど、そういう中でこういう信仰の歴史とか、他のムラの様子なんかをはなすと、そんな伝統のある貴重なものを俺たちはやっているのかいということで、意識とか誇りが高まってくる。最後はそんなすごいものであれば俺たちも展示に協力させてくれ。ということで、展示のために梵天（ぼんでん）、これは神様の依代になるんですが、こちらを村の方が来て作ってくださる。これは、展示用です。これが企画展のときの様子ですが、梵天が中央にあります。これを作って頂いたことで、展示のときにムラの方が博物館に力を貸してくれて展示に活かすことができたと。このことが地元の人たちにとって、自分たちの行事を見直す結果になったということです。もう本当にやめようと思ったけれども続けていこうかと思った。若い息子さん世代の方たちが展示場をみて、「ああ父ちゃんたちがやっているのはこういう意味があったか」ということで、地元の文化を残すことに一役買うことができました。この十年でこの天道念仏と

消えゆく地元の伝統文化をもう一度見直すきっかけに

いう行事が半分以下に減っています。このままいくとほんとに無くなってしまうと考えています。

今までいろんな連携で地域にできること見ていただきましたが、博物館の物・人・知恵を使って（ここにお金がないのがポイントですね）、地元の市民・大学・寺院に、物、お金・知恵を加えることで何倍もの成果を上げることができます。ですから様々な可能性を博物館を経由して市民の皆さんに還元するかたちに生まれ変わらせて提供するんですね。したがって連携事業を積極的に行うことが地域への貢献となる、というのが私どもの結論です。２つ目は、企画展示は地元密着のテーマを行うことにより、忘れられていた伝統文化を再認識させることになると、何より先祖の子孫に対する深い思いを知ることになり伝統文化の振興を期待できる。これは本当に、地元の地道な調査を通じて感じることですけれども、地元の名も知らぬ名前のご先祖がやってきた信仰とか文化の意義をですね、子孫の幸せを祈ってやったことがほんとたくさんあります。そういった展示をやることによって地元の子孫の皆さんがその意味に目覚めてくだると、ということです。

八千代市立郷土博物館では以上なようなことをやっております。

パネルディスカッション「博物館が地域に果たす役割」

コーディネーター　千葉県立中央博物館長　佐久間　豊
パネラー　勝山輝男・田原直樹
尾崎煙雄・佐藤誠
コメンテーター　平川南

司会（林）：それではこれから博物館が地域に果たす役割というテーマでパネルディスカッションを始めたいと思います。パネルディスカッションにつきましては、進行を当協会会長であります千葉県立中央博物館の佐久間館長に、お願いしたいと思います。では、佐久間館長お願いします。

佐久間：改めまして午前中から基調講演をいただいた平川館長さん、事例報告いただいたパネラーの方々、本当にご苦労様でした。午前中聞いていまして、先ほど平川さんとも話したのですが、話が盛りだくさんで、皆さんがんばっているなと改めて感じています。この後、パネルディスカッションを行わないほうが後味が良く終われるんではないかとも思ったのですが、そうもいかないので、これから約1時間、お聞きいただければありがたいと思います。

いずれにしても、いろいろな取組みが、いままであったわけで、博物館は元気がないと言われるのは不思議でならないんですが、それは外部との情報交換がまだまだ足りないからだと思います。武士の商法ではないですが、そんな感じがしています。

パネルデッスカッションに入る前に2点ほど皆さんにお話ししておきたいことがあります。先だって10月1日・2日、北海道の旭川市で、日本博物館協会主催の全国博物館大会が開催されました。なぜ急に私が紹介したくなったのか。さきほどの基調講演も含め、いろいろな話を聞いている中で、何か全国博物館大会のテーマと共通しているところがある。平川さんの話の中で、博物館は現代の視点から展示を見る。博物館の展示は発信と受信。他の方々も言っているわけですが、そういう双方向のバランスが大事である。特に、この点が共通していたのではないかと思います。全国博物館大会は、全国から300名近くが参加したわけですが、「博物館のこれから―地域と文化の創造－」というテーマで開催されました。その中で、私が特に印象に残ったのは、アイヌ民族の萱野史朗さんを始め他の方々も大体同じような話をされていましたが、旭川

市の瀬川拓郎さん、考古学の世界では有名な方ですが。この方が話したことばの中に「これまでのアイヌ民族の展示では、いままでは江戸時代ぐらいまでを対象としていた例が多かったが、過去だけではなく現代に脈々と文化を伝承しているアイヌまで含まなければだめなんだ。現代の人たちが、当事者であるアイヌの方々が何を求めているか、適確に把握して果敢に展示に活かしていかなければだめだ。」といった内容です。私は、この指摘はアイヌの問題だけではなく、私たちの地域についても共通していると思うんです。そういった視点から、新たな地域文化の創造に向けた博物館の役割について話されたことが印象的で、本日のシンポジウムの目的と共通しているのではないか感じたので、あえて紹介させていただきました。

続いて今回のシンポジウムの趣旨について話しをさせていただきますと、先ほど午前中に川根副会長さんからもお話がありましたが、昨年度に社会教育三法の一つとして博物館法が改正され、とくに博物館に期待される役割としては、キーワードで言えば地域振興と知のネットワークとなっています。平成20年2月19日に中教審が出した答申「新しい時代を切りひらく生涯学習振興方策」もそうですし、この答申を追いかけるように、同じような趣旨で千葉大学教育学部の明石要一先生が会長をされている千葉県立博物館協議会でも博物館における地域振興のあり方についての答申が出されています。さらに博物館法を含めた社会教育三法の改正に伴う付帯決議が衆議院・参議院に出されて

いるわけですが、この中でも同じ内容が、具体的な方策も含めて示されています。さらに昨年の7月1日に出された教育振興基本計画。これは教育基本法を受けたものですけれども、この中でも同じようなことが言われています。まさに今、もちろん高いレベルの資料収集、調査研究のベースは必要ですが、そういったものを活かした地域振興のための知のネットワーク構築を博物館は問われているのではないかということです。こういった背景を受けまして、本日、司会進行をしている浦安市の林さんもパネラーとして参加され、本年3月10日に千葉県教育委員会主催「千葉県美術館・博物館職員等研修会」において、「美術館・博物館の地域連携のあり方について」をテーマにして、この場所でディスカッションを行ったわけです。そこでも私、コーディネーターをさせられたわけですが、たとえば同じような館同士、たとえば浦安市郷土博物館と同じ種類ですと房総のむらと連携ができないかとか、同じ地域の館、たとえば中央博物館と千葉市郷土博物館、千葉市立美術館と館種を超えた連携できないかといった議論をさせていただきました。そういった中から、千葉県博物館協会が主体となって地域振興をテーマにして、いろいろな取組みをしようということで、調査研究委員会と研修委員会がタッグを組んで今回のシンポジウムに至ったという経緯があるわけです。いよいよディスカッションに入りたいと思いますが、何か結論を出そうというのではありません。いままでの話を聞いて、いろいろなアイデアが皆さんの中に湧いていると思いますけれど、さらに皆さんが全員参加したディスカッションを通して、多くのヒントを得て戻っていただき、それぞれの博物館活動の中で活かしていただけたらと思っています。

それでは具体的な進め方として、最初に佐藤さんの方から、先ほどの私の話の後を受けて、千葉県博物館協会の調査研究委員会として、どのような経緯で本日に至ったかということを、お話していただいてから、ディスカッションに入っていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

佐藤：はい。今、佐久間会長からありました私が調査研究委員会の委員として、このシンポジウムの立ち上げまで、いろいろと協力させていただきましたけれども、その経緯を簡単に順を追って説明しておきたいと思います。

昨年の秋から全国の地域と連携してさまざまな先進的な取組みをしている館を視察に行こうということで、4館視察に行きました。今日、パネラーとして来て頂いている方々がその4館の代表ということで来ていただいた方たちでいらっしゃいますけれども、兵庫県立人と自然の博物館さん、滋賀県立琵琶湖博物館さん、神奈川県立生命の星・地球博物館さん、そして平川先生の山梨県立博物館さんということで視察に行きました。それぞれ独自のコンセプトを持って、地域にできることということで取り組まれていますけれども、私たちが視察に出かけた印象で簡略に申上げますと、「ひとはく」さんでは非常に、自主研修グループの活動というのが、博物館参加で活発にそれぞれに研究者の方々が顧問のような形で付きまして、指導・助言をされている。そのグループの中には、NPO化して自主的な活動を始めたところもあるということで、博物館が育てたグループがどんどん成長して新しい局面を迎えているということを感じました。

そして滋賀県立琵琶湖博物館さん。こちらも市民と博物館を連携するグループを「はしかけ」という名前が付いているのですけれど、「はしかけ」という友の会的な組織がありまして、同じようにさまざまな研究テーマを持って活動している。実際に連携しているわけですけれども、やはり会ごとに活動の内容に温度差が出てきたところもあるということで、もうひとつの課題が発足から9年たち発足時のメンバーの方々が年齢的に高齢化している。だんだん活動する人が減ってきてしまっているということで、若がえさせるためにはどうしたらよいのか。というようなことを仰っていました。

そして3つ目、今日いらしている神奈川県立生命の森・地球博物館さんですね。友の会の組織は、館主導の組織であるということ。また担当している職員の方々は異動も無く、安定した活動ができている。ただ同じように会員さんの高齢化が問題になっている。あと、博物館同士の連携の「ミュージアムリレー」という活動があるそうですけれども、現在活動は館長レベルの交流に留まっているので将来的な発展に期待したいということ。あと、学校対応には現在派遣教員が3名いらっしゃるそうですけれども。学校のニーズが新学習指導要領の影響もあってどんどんと高まっていて、3名でもなかなか対応が難しいということを伺っております。

最後に平川先生の山梨県立博物館ですね。こちらは

先生のお話にありましたとおり館の立ち上げから県民の意見を取り入れて作られた本当に県民のための博物館ということでスタートしたわけですね。そして運営も全て多様な委員さんの構成による運営委員の皆さんの話し合いで行なわれている。地域との密着という中では、地元のNPOグループ「つなぐ」という会がありまして、その会が館から講座等の委託を受けている。会が責任を持って講座を企画・実施している。非常にいい関係で「つなぐ」の皆さんが博物館をサポートする講座等を実施しているという状況です。

以上ですけれども、今日のシンポジウムの課題といいますか、論点の中で見えてきたことに、中央博さんの発表にもありましたけれども「博物館が地域にできること」として、そういう地元の生涯学習グループの支援とか学校への協力がありますけれども、逆に地域が博物館にできることとしては他にどんな可能性があるかというようなことが一つですね。二つ目が、市民と学校との連携は全国的に多いですけれども、事例は少ない民間企業との連携等ですね。あと公民館、図書館さん。しいては病院とか。いろんな施設があるんですけどね。そういうところとの連携の可能性にはどんなことが期待できるのか。またグローバルな視点から地域にできることを考えてもいいんではないか。というようなことが出てきています。以上がこのシンポジュウムに至るまでの経過であります。

佐久間：どうもありがとうございました。佐藤さんからお話があったように、博物館が地域にできること、逆に地域が博物館にできること。そういった双方向の関係を頭に置きながら、パネルディスカッションを進めていきたいと思います。先ほど司会の方からも、午後のディスカッションの冒頭に事実関係中心に質問をお受けするというお話があったと思います。会場からご質問があったら、ぜひお願いしたいと思います。ないようでしたら私から振りますよ。君津市教育委員会の矢野さんどうですか。君津市に博物館をつくると聞いていますが？

矢野：君津市教育委員会の矢野と申します。パネラーの皆様のお話をお聞きして。大変参考となりました。パネラーの尾崎さんは県立中央博で、フィールドミュージアムに係わられていて、三島小という君津市内の小学校で活動しています。君津市は80％が山です。県の「山の博物館」の設置を期待していましたが、実現しませんでした。その代わりに尾崎さん達の研究グループが来て、地域のこと調べています。先だって、地域のお祭りがあったのですが、中央博のフィールドミュージアムの皆さんも、お祭りに参加されていました。地元の人と顔見知りになっておられているということですね。私も文化財を担当しているのですが、市の職員以上に地域と密着しているなと感じました。館が無くても地域との関わりが見えている。情報もフィールドミュージアムの人達に聞けばわかる。そういった逆転現象を起こしています。今、博物館の基本構想を行っています。しかし、財政難で先行きどうなるかわかりませんが、今回私が参加したのも、少しでもこれからの構想に役立てればなと思ったからです。これまで、基本構想の検討委員会の研修で、文科省などの先生たちの話を聞いて、これからの博物館は、市民参加型ということでした。兵庫県の「ひとはく」や滋賀県の「琵琶湖博」の話をされていました。君津市は面積が300平方キロ以上あり、市原市に続いて県下で２番目の広さです。市内には小糸川と小櫃川の２つの川が流れていまして、流域ごとに文化が違うわけですね。小櫃川流域には久留里城資料館があります。市役所は小糸川流域にあり、「新日鉄」がある関係から、退職された方が、定年を迎え、やっと地域のことを調べるゆとりがでてくる。公民館単位でサークル活動をしている方々が、生涯学習課の窓口に来て、いろいろと聞いてきますが、なかなかそれにすべて対応できていない。地域のことに興味をもつ市民はいるのですが、どうしたら、市民が参加する博物館ができるのか、どのような方法で、最初に市民と関わってきたのか、それぞれのパネラーの方にお伺いします。

佐久間：どうもご苦労様です。さきほど山の博物館の話が出ましたが、まだ、完全に計画が消えてるわけではないですが、今後の見通しはわかりません。現在、体験を中心とした中央博物館の分館として勝浦市に海の博物館があるのですが、それと対をなす分館として、清和県民の森の中に山の博物館を設置して中央博物館の分館とするという構想があって、話しをされたということですね。念のため説明させていただきました。それでは、いまの質問で、市民参加はどのようにしてきっかけをつくっていったのかという点ついて、順次、教えていただきたいと思います。コメンテーターの平川さんには後ほどゆっくりお話を伺うとしまして、順番に神奈川県さんから…。

勝山：先ほど話題提供で植物誌の話で、最初新聞で

募集したようなことを言ったんですが、ああいうのは他にはない。結構大変だし、新聞もなかなか取り上げてくれない。多いのは講座みたいなものを立ち上げて、平塚市の博物館では、例えば漂着物を拾う会だとかそういう市民講座をやって、それが終わったらそのメンバーで継続してやっていく。やっぱり最後は漂着物の特別展をやりましたし。それから相模川をずっと源流、平塚の場合は河口から源流まであるもんで、それを講座みたいな形で募集して、その人達で相模川源流までできるだけ辿って、それを最後は企画展で展示するところまで活動します。市民参加で、博物館の中でサークル活動している。それは多分琵琶湖さんの話と同じようなところがあるんじゃないかと思うんです。私どもの博物館はそういう講座からだんだん広まっていって、市民参加になっていくとか、あるいは既存のグループなんかを通じて市民参加をやっていく。そういうのがあると思います。

佐久間：尾崎さんは、準備いいですか。では、田原さん先にお願いします。

田原：先ほど佐藤さんのお話を聞いていて、なんでこちらに声がかかったかが非常によく判りました。最初にこれをお聞きしていれば、もう少しその部分を膨らませられたかなと思っていたところが今のお尋ねの部分です。私どもの博物館だけではなくて割と自然史系博物館に多いタイプなんですね。今、神奈川県博さんの話の中にあったように、学芸員が中心になってサークルを作っていく。それを大阪自然史博さんではサークルといっていますが、うちは特に名前をつけておりません。それを大阪自然史博さんでは、博物館活動とは別に個人の活動としてやることを奨励しているんですが。うちの場合は完全に事業の中に組み込んでいます。私共の博物館、セミナーが売り物だといいましたが、それはセミナーが学芸員と市民との接点、県民との接点だからです。セミナーは数は少ないですけど、1対1の関係をつくれる。うちではセミナーは単なる、人を集めたり、話をするだけではなくて関係づくりの場だと明確に位置づけております。濃いファンをターゲットにして、ゲストで来ておられる方をホストの側にする。そういう考え方ですね。ひとりじゃみなさん何もやらないです。それが複数になるとなぜか活動が生まれてくるんですね。それで生まれたのがほとんどです。学芸員個人がやるセミナーから、その学芸員を取り巻くサークルが生まれて、それがいろんな活動をすることによって、その活動に一般の県民の人がゲストとして参加する。ということは、前からいた人がホストになっているんですね。半分くらいこういう事なんですね。完全に全部とはいえないのが我々の悩みなんですけれども、やっぱり我々の関わりが途切れないことが大事である。だんだん我々の負担が軽くなっていくとはいえませんが。一応そうゆうコンセプトでやっております。ですからうちは、研究者37名もおりますから当然ですけれども、セミナーの数が年度当初予定しただけで250コマくらいです。すべて館外でやる講演みたいなもの全部かき集めますと、これはいろんなところから個人的に依頼がくるようなものを含めてということですが、だいたいその総計が800ぐらいこれが全部そういう機会です。それともうひとつ話しが長くなりまして恐縮ですけれども、今のヒントになると思われるパートナーシップの説明がうまく出来なくて。これもいい機会をいただきました。国の補助事業でボランティア養成講座を開けといわれました。これは、当時あった私達の博物館を入れて3館共同でやれ。県立の教育委員会所管の3館共同で。私ども本当はやりたくなかったんですね。しかも展示に関連することをしたいと皆さん言ってくるわけですね。その動機を聞いてみますと、展示解説やってみたい。こっちとしてはですね。それはもう展示解説の業者の方もおられましたし、それをボランティアでやられると（予算）を切っちゃうぞといわれるに決まってますので、まあ勿論それだけではないですけれども、困ったことになったと思いました。ですからその講座を受けた方々から、うちで活動したいという方がおられたんですけれども、まず申上げたのは、手伝いは一切いりません。うちの館をよく見て、なにか必要なものはないか、というのを考えていただいて、そちらから提案してください。と少し突き放しました。でかなりの方が離れました。お金もまったく出しませんし。ということで、館のお手伝いをやりたいという方は拒否しました。そうしますと最後残ったのは、自分達だけでなんかいろいろやるという方々が残って。それに5年かかりましたけど。5年間は5人の担当が必死に面倒をみて。それでできたグループが先ほどちょっと言いかけた「NPO法人人と自然の会」です。今は正式に法人格を取得しています。博物館関係ではかなり早かったんではないかと思いますけど。その人達は何をやっているかというと、毎月第3土曜・日曜日にですね。独自の彼

等主催の一般向け事業をやります。フェスティバルの時も彼等主催のイベントをいくつかやりますし。それだけじゃなくて臨時でやるんですけれども、独自に募集してボランティア養成講座みたいなものをやっておられる。我々はほとんどノータッチです。協定を結んでやっております。そして部屋なども使っていただいておりますが。パートナーづくりはこれと同じです。私共はそういうやり方をやってきたということで。これが唯一の方法とは思いませんが参考になればと思います。もうひとつ付け加えたいのは、ボランティアポリシーを一生懸命議論したということです。館員の中にはボランティアを便利屋に使うものがいるんです。絶対それはさせないように担当が目を光らせて、やらせませんでした。結局お手伝いになってしまうと対等な関係が基本であるパートナーにはなれませんから。あくまで対等な関係をいかに築くかということがとても重要だと我々は思っています。ただ最近お手伝いのボランティアも欲しいなとも思っています。財政事情が悪化してますんで、今そのへんをどう考えようかなと悩みがないことはないです。それも付け加えておきます。少し長くなりました。

佐久間：続いて佐藤さん。

佐藤：それでは展示とか講座に市民のみなさんを巻き込む術ということで。うちは大きく４つなんですね。いろんな館でやっていますが、一つ目が市の広報で公募をする。これは市民企画展で平成16年度、展示委員５名を募集しまして展示会をやっております。今お手伝いという話がありましたが、草むしりとかそんなことのお手伝いをやってください。という公募でボランティアの方が10名くらい登録しています。それ以外展示や講座でというとあと二つありまして、調査研究の活動の経緯で出会った方々というのが沢山おりまして、例えばある古い農家の方にＩさんという方がいらっしゃるんですが、その方が250年経った家を壊す、そういう話を受けました。その壊す経過を調査をしていく中で、お宅に関する資料を使った企画展をしましょうということで。結局その調査研究で出会ったＩさんという農家の方たちに応援していただきまして、「昔のくらし農家展」ということで展示をしました。さらにその方たちに、通常だと講演会をやるんですけれども、普通のおじいちゃんおばあちゃんなので「私たちはそんなりっぱなこと言えない」ということでしたので、おじいちゃん・おばあちゃんの昔のくらしを市民のみなさんに体験してもらいましょう。というので、座敷を作って囲炉裏端を作って、餅を焼いておばあちゃんが市民の方に出す。かたやおじいちゃんが洗濯板で子ども達に洗濯を教える。なんていうイベントをしまして。普通のおじいちゃん・おばあちゃんでも一般のそういうことの経験の無い市民の方に企画展の関連事業ということで、講師をやっていただきました。最後になりますけれども色々なジャンルの講座をやる時に、私たちがアンテナを高くしているのが、地域情報誌をよく読むということですね。取材している方の中に、この人面白いぞ。言い方悪いのですけれどもこの人使えるぞと。と思った方をチェックするんです。こちらに講座の構想が立った時に。あの時にこういう人がいたね。という話を出しまして。その方にアポイントメントを取って博物館に協力してくれませんかといいますと、意外と地域情報誌に名の挙がった方というのは、貢献したいという方が多いので、いろいろの形で協力してもらっています。うちは、以上４つという形です。

佐久間：どうもありがとうございました。じゃあ今、尾崎さん、博物館設置委員会というんですか？君津市教育委員会の矢野さん。設置検討委員会というんですか。

矢野：博物館基本構想。

佐久間：博物館基本構想。本日は君津地方の方の集まりではないのですが、委員になっている尾崎さん、いまの話を聞いて何かアドバイスがあれば一言。

尾崎：さきほども矢野さんと少しお話したんですけれども、君津市は博物館をこれから作ろうという、意欲的な構想を持った自治体です。『君津市史』という非常にりっぱな本を沢山出している。これは歴史から自然すべてに渡って非常に内容が濃いものです。これをベースにして、そこに是非立脚して作って欲しい。もうひとつは今日の話にも出てきたし、矢野さん自身も非常に悩みをお持ちのようですけれども。講座とか市民連携がせっかく盛り上がってきているんだから、博物館作る前から始めたほうがいいんじゃないか。そのアイディアをぜひ生かして博物館準備段階から始動していかれたほうがよい。

佐久間：ありがとうございました。矢野さん、いまの段階では、まだ十分に間に合うわけですから、ぜひ、いまから講座とかを通して市民とのつながりを深めていってください。それでは君津市さんの話題から離れ

まして、会場から質問をお願いしたいと思いますが、何かございませんか。県立中央博物館の新さん、しゃべりたそうだけれど。

新：・・・・。

佐久間：よろしいですか。それでは少し佐藤さんから出た話も含めて、団体とか公民館とかとの連携について検討を進めていこうと思うのですが、いままでかなり方向性が出ていると思います。そういう意味では、再確認になってしまうかもしれませんが、先ほどお話を聞いていると、どちらかというといい話ばかりでした。ただし兵庫県さんの場合は中央博物館とまったく同じような問題を抱えているなと改めて感じたんですが、やはり、いろいろと失敗例があると思うんですね。そういったものを含めて何点か論点を私の方から出させていただいて、少し議論をしていきたいと思います。お互いにパネラー同士で質問しあっていただいても結構ですから、よろしくお願いいたします。

今回の事例報告を拝見させていただきますと、地域振興に向けて、いろいろな活動を行っているわけですが、兵庫県さん、あと神奈川県さん。やはり私の印象としては、県下全域を対象に強いリーダーシップを持って、地域振興に関わっているのではないかと思います。それに対して中央博物館は県立ですが、どちらかというと房総の山のフィールドミュージアムと八千代市博さんは地域住民とより限定的に密着して、その地域の中での限定された活動を通して地域振興と関わっているのではないかと思います。尾崎さんからは反論があるかもしれませんが。まず、このように大きく二つに分かれるんじゃないかと認識させていただいて、そういった前提に立った上で、より効果的に地域振興に寄与するための博物館のあり方について、議論を深めていきたいと思っています。先ほど佐藤さんからありましたけれど、同じ地域内から他の機関・団体、同種の博物館も含めて、八千代市博さんの関係ですと資料館がありましたよね。まだ、ありますね。あとは館種を超えて、美術館・博物館、地域の博物館ですが、さらにNPOも含めて民間団体とか企業、大学・社会教育施設である公民館等、図書館まで入ると思うんですが、こういった幅広い選択肢があるわけです。それぞれについて事業内容なども勘案しながら、地域の特徴も活かしながら、連携をいろいろ考えているようです。そして他の団体との連携を、どのような効果を期待しながらやってるかですね。質問としては抽象的かもしれませんが、何かご意見あればお出しいただければとありがたいと思います。では順番に佐藤さんからいきましょうか。先ほど佐藤さんからそういう方向でやってみたいというお話もありましたね。

佐藤：私どもいろいろな交流を通じて地域に還元することをやってきましたけれども、今まだちょっと手付かずでやってみたいなと思っているところに、八千代市には工業団地が三つあるんですね。博物館の近くにも工場・企業が密集したエリアがありまして、「TOTO」さんとか「川崎重工業」さんとかいろんな会社が入っています。実はうちの博物館の展示スペースに産業コーナーがあります。その産業コーナーに、工業団地から資料としていただいた製品が並んでいるのです。ただ面白い事に直接販売に結びつかないということもありまして企業の方が定期的に、「新製品を出したから置いてくださいという」依頼が来ないんです。ですから企業によっては、10年前の商品が並んでいたりするので、それはさすがにまずいと思って企業に連絡をすると、営業マンの人が新しいものに入れ換えにくるということがあります。私がふと思ったのはこの企業の方達も、地域を地盤として貢献してきたという歴史があるのですが、産業関係の企画展示は意外に少ないんですね。歴史とか民俗は多いのですけれども。地域の産業の展示というのは今までやったことが少ないと。これだけの企業の方達と何か連携できないのかということも考えています。館のロビーに9面マルチっていうテレビが9台並んでいて大型映像を写すという視聴覚機器があるんです。ところがレーザーディスクなんですね。ご存知のとおりもうレーザーディスクは生産していませんので、壊れれば終りということです。現在、壊れていますけどこれを新調するにはやはり何百万かかる。レーザーディスクからDVD化するには。その時に企業さんをスポンサーにして、企業映像のCMを流しながら協力してもらえる方法がないだろうかと。今実際に市の広報紙の一部にも企業広告を載せてます。

佐久間：佐藤さんの話を聞いて思ったのが、県立の現代産業科学館の展示運営協力会です。現在では増えているかもしれませんが、約60社の企業が一体となって独自に企画展などを行っています。何か他の館で展示運営協力会のような組織はありませんか。よろしいですか。それでは続いて尾崎さんからよろしくお願いします。

尾崎：連携先というお話ですけれども。我々の場合は先ほど紹介したとおりですが。非常に多様な相手とお付き合いしています。連携先と大雑把に分けるとふた通りあるんですがそれは目的によります。博物館の利用を促進するという。単純に言うとお客さんとしてお付き合いする例で、それから博物館の専門であるところの資料に関わってお付き合いする。そのふたつに大きく分かれています。その利用者を増やす活用を促進するという面での連携の場合は、連携するお互いが、博物館側も連携する側も何かしらメリットがある。それからお互いが楽をできる。そういう関係が基本だと思うんです。それがうまく成り立つ相手と連携する。それを増やしていく。これがこれまでの付き合いの仕方だったと思います。一方資料や研究に関するお付き合いの場合には単純に相手を増やすというよりは、資料研究分野で価値のあるもの。面白い素材・題材といったものが見出しえる、見出すことが出来るという内容です。その二通りを使い分けています。

佐久間：身内で話をするのも何ですが、かなり柔軟に連携しています。この6、7年の間で、かなり増えてきたんじゃないかと思います。ただし私も十分把握してなくて申し訳ないんですが、途中で意欲がなくなって脱落していったとか、いういろんなケースあるんじゃないかと思うんですが、どうですか。増える一方ですか。

尾崎：沢山あります。お付き合いが消えていくってことはすごくあります。これは当然だと思うんですけど、連携とは主体と主体の関係で成り立つものですから、原理的にダイナミックなんです。常に変化しています。ただ変化しながらも何というかネットワークを目指すそういう感じです。

佐久間：わかりました。どうもありがとうございました。では順番に田原さんよろしいですか。

田原：地域、私どもの場合は兵庫県ということになるわけですけれども、その兵庫県の他の機関・団体とは、アウトリーチをやっておりますので、いろんな関係ができていくわけですね。ところが先ほど食事の時にも話していたんですけれども、同じ県立の館とはやってないですね。どうも県立館はライバルのように見えてまして。どこかが下がればうちが上がるというわけではなかったんですけれども。全然連携がとれていませんでした。ところが連携の経験を積む中で考え方変わってきた面があります。つまり、前はその地域キャラバン先が地域にあるとか、同じような事業をやるとかが連携の動機の中心だったんですけれども、最近は異業種というか異なった博物館との連携もかなり考えることになりまして。そうなりますと、まず県立同士でいろいろとできることがあるなあと気づいて。それについて今はじめているところです。まだまだ今からなんですけど。ただこの手の連携をやる時にですね、組織対組織でやりましょうという形は何かつまらないことが多いですね。やっぱりたまたま何かで知り合えた人間同士が、うまい人のつながりを活かしてやっていくというのが重要で、コンテンツはこじつけでいいのかなと思っています。兵庫県下のある市に俳句等に特化した市立の文学館があるんですが、そこにすごく有名な芭蕉の俳句「古池や・・・」があるんですね。ではカエルのことをセミナーで使おうじゃないかということで連携するとか。そういうこじつけのようなこと、何でも構わないんですね。むしろ大切なのはそれを一緒にやろうということで、そういうのはやっぱり人間と人間の接点から生まれますので、やっぱり今日の他の方の発言の中にあったんですが、関係づくりがとても重要な話なのかなと思います。

それからもう少し広げて多様な相手との連携ということで、民間のお話が先ほど出ていましたけど、うちでは民間との連携という点では、資金源的な意味あいが見え見えで問題が無いわけではないんですが、シンクタンクという看板が片方にありますので、受託研究をやっています。その中で工場からの受託って結構あるんですね。最近は各種工場も周辺の住民の方とうまく関係を結びたい。例えば、工場の敷地の中に自然を整備して住民の方々が自然に親しめる、自然と触れ合う場として公開したいという希望がある。それはどんなふうにやればいいかなどの受託が結構あります。そういったところから少しづつ企業さんとの関係が出来てくると、先ほどのつながりの話ですけれども、フェスティバルにも出てきていただけるようになる。例えば「キリン」さんもフェスティバルによく出ていただける。博物館のフェスティバルにアルコール飲料はどうかという話もありますが。うちの場合はフェスティバルの実行委員会でやっているので必ずしも博物館が組織でやっているというわけではない。まあそれはいいとして。そういう形のものを拡大してくると今度は社員研修に使えないかという話が今あって、社員研修というのはいい切り口だなと思っているところです。

そうすると企業のほうもただ協賛金を出すだけではなくお金が出しやすいということになりますので、また企業側も環境分野ではいろんなＣＳＲ活動をやっていますので、やがてはそういう受け皿までいきたいなと考えているところです。

長くなりますが、もうひとつ、連携先として注目しているところは学校なんです。学校とはいろんな関係があるんですが、ただここは悩みがあって学校の先生方にこんなことを言って大変申し訳ないですけども。こちらに丸投げといったケースが多くて、がんばればがんばるほどこっちがしんどくなるという話があります。じゃあなんのための連携かといえば、やっぱり学校団体にきてもらうことは博物館にとって非常にありがたいことですので、利用者という意味での考え方とのバランスが難しいなと思ってます。それから最後に先ほどのプレゼンの中でちょっと話を出しました地域研究員と連携活動グループ、正直これは伸び悩んでおります。非常に。

佐久間：ちょっと、いま団体との連携のことについて、テーマはこじつけでいいという話がありましたが・・・。

田原：（こじつけで）いいですかね。

佐久間：私も、テーマはこじつけでもいいと。とにかく一緒にやろうということが必要だということ。千葉県博物館協会において、こういうことをやろうというのは、それが最初の目的でスタートして、同じような考え方があるのだと知りました。実行委員会方式でやるというのも、どうかなと思いますね。博物館で大々的に、たとえば房総のむらでワインパーティーやろうと思ったけど無理でした。そういう時に実行委員会を設置してフェスティバル形式でやれば可能なのかなと。今度、久留里で行うのをどういう形でやるのか、フェスティバル形式でやるのか知りませんが、そういった方式は十分に考えなければいけないと改めて感じますね。また私の考えでは千葉県博物館協会が今回主催しているわけですが、後ほど神奈川県さんがそういったこと含めてお話しいただけたらと思いますけれど、まず最初に千葉県博物館協会がゆるい広い形でスタートすることが非常に効果的ではないかと思っています。兵庫県さんの博物館協会、そういった動きについて紹介していただいた後、神奈川県さんにはその問題も含め、少し話していただけたらありがたいと思います。

田原：兵庫県の博物館協会の活動は総会的なものが年１回ありますので、それに併せて研修会的なものを加えて、年間２回程度やってると思うんです。それだけのような感じ、それが現状ですね。今回、千葉の県博協さんがこんな活動やるといったらすごいショックを受けてましたんで。あるいはこの次から変わってくるのかなと期待しているところです。

佐久間：ありがとうございました。

勝山：それでは神奈川なんですけれども。先ほど今日のお話でも出ていましたけれども、県立博物館は歴史博物館と神奈川近代美術館と金沢文庫と（うちの館で）４館あり、条例は同じで基本は一緒なんですけれども、事業レベルではほとんど連携していないんですね。さっきおっしゃったように予算取り合いということもあるかもしれませんけれども。むしろ市町村の博物館と、特に自然系、うち自然系なんで市町村の博物館のなかに自然関係の学芸員がいればかなり連携が、例えば先ほどの植物誌みたいなものがあります。

それから小田原市の郷土博物館などは、うちのミュージアムフェスタに一緒に参加していただいて、そういった感じでいろいろと連携しています。結構、市町村の博物館とはありますね。あと国立公園のビジターセンターあるいは国定公園のビジターセンターとは展示物なども、いろんな人的交流も含めて結構行き来があります。神奈川県の県博協もやはり総会と何回か研修会をやっていているところなんですが、今年度は横浜開港150周年記念ということで、似たようなテーマで各館が企画展をやっていく。それは協働でもってやろうというような取組みが行なわれています。うちは自然系なので、あんまり関係なかったけれども、横浜開港に伴って外国に紹介された動植物の展示を小さく本当に小さく作りました。それからもう一つは県博協の中の分派活動に見えちゃうんだけれども、小田原と箱根は接近していて、箱根は国立公園、自然を売り物にしているはずなんだけれども、行くと何とかミュージアムというのが一杯あるんですね。そこと連携をしていくということで、ウエスカムズという西湘地域の博物館の館園長会議からスタートして、お互いを知ろうということで、博物館の館員の交流も兼ねてミュージアムリレーというのをはじめたんです。それは１回、２ないし３館、割合近い博物館を廻ってお互いに展示を見たり企画展を見たり、それに一般の方も募集します。そうすると、自然系の博物館にはあまり美術系の人は来ないんだけれども、隣に寄木美術館というのが

あり、そこ中心にやると普段そっちに行く人がこっちに来てくれたりすることがあって、少し協力はできるかもしれない。ただこれは箱根地域にあるので箱根地域はいわゆる観光資源として、いろんなところで利用できるようになっていくんじゃないかなと思うんですけど。ただ会費もありませんし、かなりゆるやかな集合体でやっています。まだ秘めたものがあるんじゃないかと思います。ミュージアムリレーというものがずっと10何年続いているというのが成果です。あと民間とは残念ながらやってない。やってみると面白いかもしれないですが、箱根の例えばさっき話しに出てきた箱根の寄木細工とか、小田原では蒲鉾作っているから蒲鉾屋さんと協力できれば、タイアップできるのかもしれないですけど。まだ民間との連携の事例はないです。

佐久間：私から一言だけ。先ほど聞こうと思ったんですが、レッドデータブックを作成する段階での県立博物館の役割。県立博物館そのものが生命の星・地球博物館の前身も含めてですね、1979年と1988年と2001年の３回にわたって市立博物館と連携しながら作成作業を行っています。県立博物館の役割というのは、ずっと同じような指導的な役割を果たしてきているのか、段々変わってきているのか、その辺について少し聞かせていただけるとありがたいのですが。

勝山：まず最初の植物誌の話とレッドデータブックの話しと二つ入っていますけれど。植物誌の方は最初発足した時は県立博物館が中心となって、もちろん横須賀市の博物館、平塚市の博物館がかなり協力してくれましたけれども。2001年になると段々各地域の（博物館）数も７つに増えまして、それぞれの館の独自性がかなり強くなっていく。当然集まってくる標本というのは、それぞれのところが収蔵するようになる。これはある意味不便ですね。例えば標本を調べようとすると７つの博物館を全て廻らなければならなくなるので、資料に関しては分散化していくわけです。各市町村の博物館の方は逆に力を付けてくる。今は2001年の植物誌が終わって、その次の段階に来ている。例えば相模原市は市町村合併により市域が拡大してきている。相対的に県の博物館の役割は下がってきて、各地域の博物館の役割が上がってきている。それはある意味ではいいこと。情報が集約できてそれを元にして県全体を通してものをみる。各地域のものは各地域の博物館が収蔵していく。これでいいんじゃないかなと思います。

レッドデータブックについても同じような部分があります。レッドデータブックを作る際には通常県の環境部が主体になって作っていくんですけれども、なんで博物館が作ったのか。都道府県がレッドデータブックを作っていない時に、うちでそういうのを作ろうかということになって、始めちゃったというだけなんです。逆に後から環境部がそれを作らなければならない時に、博物館がすでにやっていた。ただこれにはいい事と悪い事があるんですけど。いい事は環境部からは独立してアマチュアの人達を組織化してデータが取れること。それから地域の博物館とも連携がやりやすかった。逆に県の環境部とは連携があまり濃厚にできなかったというところがあります。

佐久間：いずれにしても植物誌調査の取組みにおいて、段々、県の役割というものが変化してきたということですね。皆さん、国の関係と連携されたことはありませんか。平川さんよろしいですか。

平川：以前から県博が出来た時に県博を中心にミュージアムネットワークを構築するということで、むしろ県下にある類似の博物館が県博の設立を支援するという形をとったんですね。それを県の行政指導でミュージアムネットワークというものが打ち出されて、その中で県の博物館協会を行なった時にとても面白い提案がありました。それは、小さな美術館・博物館が統一テーマで県下で展示を企画することによって、十分に参画できる機会を作ってもらえるじゃないか。つまり単独では無理でも、そういう連携があれば、地域にメリットがあるんではないかということです。一つは「富士山」をテーマにする。あるいは「水」。山梨は全国の40％のミネラルウオーターを全国に供給している、水が命というところですから、その水をテーマにした時には、実は博物館だけではなくて、自然系であろうが人文系であろうが、あるいは美術館を動員して参画できる。何か共通点のあるテーマを選んで、ある時期に全県的にそれを打ち出すことによって、県民にも外から来た人にも、水をテーマにあちこちで展示が行なわれているという広報活動も連携できる。そういうことを今回の会で意見が出たのが一つ。

もう一つは県立の博物館では、市立の博物館もそうですが、各地域の公平性みたいなことをいつも念頭に置くべきだということ。例えば福島県の場合でしたら大きく三つの地域があって、そのどこに博物館を立て

るかという時に大きな問題になって、結局、会津にできた。そうすると、「中通り」や「浜通り」の人々にとってとても遠い存在になるんですね。それは大きな県であればあるほどそういうことがあって、地域の公平性ということをどうやってカバーしていくのかが問題です。例えば先ほどの祭りとか地場産業みたいなことをテーマに扱うと、全県的に隈なくそういうものがある場合、そういうテーマを県立の博物館が扱うと、時には県全体が参画したという、やはり県民の博物館という意識が起こります。自分のところが調査研究の対象になるということは大切なことなんですね。

国立の歴史博物館の場合はそれを開館からかなり意図して展示設計していて、御覧いただくとわかるんですが、全部の都道府県の展示が、第1室から第5室までの間にどこかに必ず取り上げられているんですね。(どこかの)県の方がこられるときに追跡調査してみると、真っ先に行くのは自分の県の展示はどこにあるかということを探すんです。それは現実の市民と博物館の場合も同じで、地域をできるだけ公平に選んでやっていかないと、どこかに偏ってしまうと、そういう不満が出るんで、そういう意味では兵庫県がやっているキャラバンというのはとても意味のある事業です。あれも兵庫県の考古博物館ができるときに、各地域でキャラバンのような講演会とか簡単な展示会を開いたと聞いてびっくりしたんですね。先ほどの君津の話じゃないですけれども、私はその講演者として呼ばれていったので、この趣旨は何だと尋ねたら今度できる考古学博物館へのいわばキャンペーンの一環で、今各地を廻っていろんな催しをやっているんだといっていました。やはりこんな準備作業が必要なんだなと思いました。

佐久間：山梨県の博物館の館長さんのお話しをお伺いしているのを私忘れてましてすみませんでした。ちょっとお互い何かありますか。時間の関係もありますが。お互い何か聞きたいこととか。よろしいですかパネラー同士で。では何かあれば後ほどということで。今は国立博物館の関係で話していただいたわけですけれども。鴨川シーワールドさんの岡田館長さん来られてますか。周辺の博物館含め他の施設の連携ですね。どういう形でやっているか。広義の民間の博物館の立場から言っていただければと思います。

岡田：私ども民間の水族館でございます。博物館とはこう少しみえない線が間に入ってしまうかもしれませんが。連携とういうのは特に私たちの扱います資料、展示品というのはすべて生き物ですのでその標本や資料をですね維持管理するのに一日すべての作業を飼育作業に費やすわけです。特に地域振興というか地域の方々との何がしかの関連というのはかなり業務を圧迫いたします。ですので私達民間なんですべて来園されるお客様を有料で入っていただいて、私たちが自分達できめたグレードの商品を展示します。地域の方々と交流できるものは、すべてボランティアで教育的配慮というのもあるので、それは無償という形でやっております。ですので私達が直接関連あるいは地域連携、博物館同士の連携というのは、動物園とは勿論強い連携がございます。生き物を交換したりとか飼育技術の交流とかございます。これは全国レベルで、場合によっては海外ともございます。それと地元との連携は気をつけております。これは特に水生動物を扱うので、漁師の方あるいは水産関係の事業をやられている方とのコンタクトというのはかなり重要でして、餅は餅屋というところがございますので、我々が死亡同体とか、漁師の方が持ち込んだりしたりするとかいうようなことはありますね。相手の方が取り扱いに困った時、あと動物によってはかなりデリケートな立場の保護動物というようなものをレスキューしたり、移動したりとかそういうような技術的な協力という連携をしたりとかしています。実は私達千葉県の外房というところにあるものですから、かなりこれも立地条件でありまして、地域との連携は欠かせないところでございます。あと今まで大変いろいろ貴重なお話しをいただきまして、若干ちょっと立場が私達、私達がちょっと特異なのかもしれませんけれども。私達が今考えておりました地域との連携、地域に果たせる役割というのは、先ほど申上げましたようにボランテア精神であり、それからサービスであるおまけに、それは無償であって教育的な配慮が入っているという位置づけでこれまで考えてきました。ですから県立や市立博物館の方々の話というのは、ぼんやりとなんでけれども、ひとつは不特定多数の方が対象である。勿論それはそうです。それから無償である。それから自身の博物館の学芸員の方々のノウハウを活用するということの他に、何か逆に私から質問ですけれども、心がけているものいわゆる定義的なものといいますか、こういうことが地域に果たす役割の定義の条件であるというものが何かあるんだったら教えていただきたい。

佐久間：難しい質問。誰かお答えいただける方はいませんか。（少し間をおいて）いないようですので、宿題として残しておきましょう。いずれにしても、地域、地域の博物館がありまして、地元、地元との連携を目指していただきたいなと思います。私自身この前、旭山動物園に行きまして、旭山動物園の入館者が300万人という話を聞きました。ところが同じ市内にある歴史博物館、最近リニューアルしたら、入館者数が1万3千人から1万6千人に増えたと言っているんですね。確かに増えていますが、旭山動物園を考えるとたった3千人の増加、この二つの施設の連携はどうなっているのかなと私は思うわけです。こういう視点で千葉県を考えると、鴨川シーワールドさんと私たちの公立博物館の関係は近いものがあるように思うんですが。鴨川シーワールドさんは入館者が100万人いますよね。是非、私たちの博物館のチラシとかを置いていただいて、何といっても100万人の入館者がいますので、さらに宣伝にご協力いただければありがたいと思います。変なお願いになって申し訳ありません。他の方々で、こうした連携などについてご質問があればお受けしたいと思いますが、何かございますか。なければ次のテーマとして、いま団体との連携についてやりましたが、住民との関係についていきたいと思います。ボランティアとの関係も含まれますが。たとえばフィールドミュージアムにおいて先ほどから話題になっているんですが、博物館が地域にできること、地域が博物館にできること双方向に相互のバランスよい関係が重要でないかと。どのような連携をして住民の方々との関係を深めていくのか。地域住民の方々の活動を主体にして、あくまでも博物館は支援的役割といったことなど、いろいろなケースが考えられますが、何かあれば。段々時間がなくなって来ましたので、1分程度ずつですがお願いできればありがたいと思います。では順番に、今度は勝山さんからお願いできますか。

勝山：個々、人ということなると、友の会とボランティアということになるんですけれども、友の会の方では活動の中に特筆すべきところとしてグループ活動があって、植物グループとか地学グループとかがあって。そこでは自主的な活動として講演会をやったり自然観察会なんかしています。これについては、こちらの方はどちらかというと支援っていう形で講師を斡旋してあげたり、場合によっては私達が講師になる場合もありますけれども、自分達で講師をやっているところもあります。どちらかというと僕等の方は支援に徹しています。あとボランティアはふたつの道があって、ボランティア講座というのを毎年やっています。それでも募集していますし、もうひとつはいろんな形で学芸員と関係のあったところから、学芸員の推薦という形でボランティアを受け入れてます。ボランティアの仕事の中身としては勿論展示室の解説みたいなこともありますが、いわゆる標本の整理とかバックヤードの、先ほど人手も欲しいと言ったんですけれども、人手がないと標本整理ひとつ進まない、停滞してしまいますんで、標本の入力だとか標本そのものを作成するだとか、いろんな仕事をボランティアの人に参加してやっていただいています。こういうボランティアはバラバラにやられているところもあれば、ボランティアのグループができて、どこかへ調査に出かけたり、単に標本の整理をやるだけではなくて調査活動まで発展しているところもあります。個人がいろんな形で参加する機会として友の会とボランティアがふたつの大きな柱になっていると思います。

佐久間：博物館とボランティア、友の会との関係では、ボランティアのほうは相思相愛でというわけではないんですね。

勝山：ボランティアやっている方は友の会に入っていますし、友の会の中でもヘビーユーザーの方はボランティアにも入っているんですね。だから友の会組織とボランティア組織はまったく別個につくっていますけれども、ボランティアの方は会費はないけど友の会の方は会費を払うというところは違いますけれど。

佐久間：友の会とボランティアは、その違いについて、私たちはしっかりと認識しなければいけないと、いつも思っています。では田原さんよろしくお願いします。

田原：今のボランティアと友の会との関係ですが、うちは友の会がないんです。ボランティアもパートナーをボランティアというように他の館とデスカッションする時は同じように扱うんですけれども、うちの館ではボランティアさんとは言いません。つまり、うちの館ではボランティアに近いものとしてパートナーがいて、友の会はないという状況なんですね。館と住民との関係のキーワードがゲストとホストです。住民の方がホストになって他の方にいろんなことをやる。そのための大切なキーワードである「担い手」という言葉を先ほどのプレゼンの時は忘れていたと思うんです

が。「担い手」の養成が一番のキーワードなんですね。ところがそれがうまく行かない。なかなか考えたとおりにいかないというのが非常に悩みでして、パートナーもボランティアも一度本当に考え直さなくてはいけないかなと、実は思っているところです。身近なところでと言われるんですけれども、個人を相手にするんではなくて、施設とか自治体とかですね、そういうところとの連携も少し考えていこうとしているのが昨今です。具体的な話ではないんですが。

佐久間：最後の生涯学習院構想ですか。地域を育てる博物館。その実現はひとりの担い手にかかっている。まさにこれに懸かっている。そういうことですよね。

田原：そうですね。それから560万人、兵庫県は県民がいるんです。それを考えると50人余りの館員で十分なサービスをやっていけるわけがない。その間にいわゆる中間支援するための「担い手」がいる。それをいかに育てていくかというのが、直接の理念になるわけですけれども。やっぱり非常に先が遠いなというところで、例えば地域研究員が非常に伸び悩んでいるというところです。

佐久間：じゃあ次に尾崎さんよろしくお願いします。

尾崎：私達の活動の場合にはちょっと特殊だとは思うんですが、これまで他の館の皆さんのお話では地域住民の方と博物館。博物館と関わっているということは自明です。私達の場合は博物館という入れ物がなくて宿無しの状態で活動していますんで、いきおい我々スタッフ個人とその地域との関係が中心になります。むしろ博物館と後でわかるんです。「あなた博物館の人なんだ。」まあそういうふうになります。ですからそういった形でお付き合いする時に一番大事なことは、博物館だ博物館だと名乗る必要はないんですけれども、二言目には「標本下さい」と言うこと。つまり自分は資料を集めて研究しているんだということを二言目には言うと、地域の人は「ああそういう人なのか」と認識してもらえるということが大事です。

佐久間：言葉は少し悪いのですが、知らないうちに巻き込んでいく、そういうことですか。じゃあ佐藤さん。佐藤さんのところの場合、団体と区別できないところもあると思いますが、個人的な住民という立場での協力関係についてお願いします。

佐藤：はい。単発の行事では単発に市民の方が携わるので、変な意味での煩わしさとかそういうことはないですけど。じゃあうちの館は長期展望で付き合っている市民さんはいないのかとそういうことはなくて、ひとつが八千代市郷土歴史研究会という40年間近い歴史を持つ郷土の歴史サークルがあるんですね。幸いにも前館長が会長を務めていまして、こちらで何か歴史的な行事をやる時に、豊富な郷土史研究の知識を持ったメンバーのサポートをいただいて講座の運営をしたりということが多々あります。その方たちは博物館の外郭団体ではないんで、本当に必要な時に応援をしていただくという関係を持っていますね。それは前館長が会長であることが非常なメリットではあるんですけれどもそういった人達。あともうひとつのグループが講座のOBによる同好会が四つあります。土器づくり、篆刻、古文書、竹細工です。その方たちが同好会を作って日常的に練習とかいろいろするんですけれども。こちらで講座をやる時には講師の補助として自主的に入っていただいているということで、そちらも変な気を使わずにいざという時は「おたくの館の私達は卒業生ですから」とそういう卒業生的な感覚での応援をしていただいているので、変な要望してくるとか、扱いにくい団体とかそうことはなくて、非常に身内感覚で付き合える皆さんということです。

佐久間：どうもありがとうございました。ここで会場から、吉澤野球博物館と成田市の羊羹資料館さん。それぞれの立場で、かつ特定のテーマで博物館活動をされていると思うんですが、何か地域と連携でお話いただけることがあれば。是非どうですか。吉澤野球博物館の海保さん来られていますか。すいません急に振りまして。

海保：今日は参加いたしていまして大変良かったと思っております。私どもは県立それから市立そういうものとはまったく異なる館でございまして。一人の理事長の私財でやっておりますので、非常に誰か先ほど天の声というのがありましたが、うちの場合はその理事長の声が天の声でありまして。私ども、学芸員職員がいろいろな他の館の話をそれとなく伺いまして、いろいろなことをしたいなと思いましても、その資金というものがひとりの長から出ているわけです。ですからそちらの意見を、まず第一に聞かなければなりません。こういう会に出席いたしましたことは逐一かならず報告いたします。私どもはできるだけの、まあこういうところで学んだことをできるだけ活かしていきたいという思いはありますし、扱っているものが野球ということに限定されておりまして一番連携していかな

ければいけないのは、小さなお子さんたちが野球が好きですので、（野球の）歴史というのか、公教育で本当に小さいお子さんがご両親に連れられてみえる時もあるんです。そういう時にはちゃんと説明はいたしますが、もっと広い意味で野球の歴史というものについてご存知ない方、結構多いので小さなことですが、そういったことを広めて行きたい。それから１階には一応名の知れた名品が揃っておりますので今や、そちらの方が女性たちには非常な人気で、口コミで野球博物館よりは美術館のような様相を呈しておる時もありました。今日のお話を聞きまして私どももいろいろ地域の方たちと連携をしたいと思いますが、まだ船橋市内の博物館でさえ余り交流がないんです。ですから事実、私ども孤立したような形になっておりますのでなるべく、こういう研修とかいうものには出席して、いろいろな皆さんの声を聞きたいと思っております。今日は本当に大変これはユニークで、そしてもっともっと広い意味で私どもが勇気をもっていろんなことを考えていけるんだなということを学ばせていただきまして、本当にありがとうございました。これから小さいですけどちょっと光る博物館・美術館にしていきたいと思いますし、地域の方々の協力を得たいと思っておりますので、いいきっかけをつくっていただいたと思っております。有難うございました。

佐久間：ありがとうございます。まとめていただいたみたいで。

海保：いやいやそんなことないですよ。

佐久間：たとえば中央博物館で、野球に関わる展覧会やらせていただければよろこんでお受けします。

海保：ありがとうございます。

佐久間：ええ。近々考えましょう。谷津遊園地前ですか。あそこ読売巨人軍の発祥の地なんですよね。

海保：そうなんです。

佐久間：それさえ知らない人、多いじゃないかなと思うんですね。

海保：そうだと思います。

佐久間：そのうちに教育普及課長を相談に伺わせますから、是非、ご検討いただければ。次に羊羹資料館の宮内さん、来ていませんか。私は小さい時から50年以上にわたって羊羹が大好きで、かなり羊羹には投資しているんですが、何かあれば一言お願いします。

宮内：私、成田羊羹資料館の宮内と申します。成田羊羹資料館と申しますのは、成田にあるあの羊羹の「米屋（よねや）」がやっている資料館でして、内容的には「米屋」の歴史、それから羊羹の歴史それから創業者の人間そういったものです。年に２回企画展も行なっております。そのような資料館です。あと資料館の他に、総本店の２階にギャラリーを出しております。「なごみギャラリー」というものを運営しておりまして、毎週市民の方々に、変わるがわる作品の展示を行なっていただいております。こちらも無料で展示ということでやっております。その他それは資料館とは関係ないんですが、毎週水曜日に和菓子教室を行なっておりまして、和菓子の職人が地域の方々に和菓子づくり等を教えていることもやっています。そういった意味で地域の方々と接する機会というのは今のところそこそこあるんですが、現況の悩みといいますか、企業の資料館ということですので、資料館に専任であたっている人間が１名しかいない状況で、そういう素地があるんですけれども、これを発展させていくことが、なかなか時間が取れない。私も資料館の他に、他の仕事も掛け持ちもあって、そのへんが非常に厳しい問題です。まず年に２回の企画展ですね。そのへんを考えると、なかなか難しいものがありますね。今後いろいろと博物館の方と連携してやっていきたいなと思います。

佐久間：ありがとうございます。羊羹の展示も含めて試食会なんかも是非うちでやっていただければ喜ぶ方もいると思いますので、よろしくお願いいたします。県博協としても羊羹の歴史とか、そういったことを私たちもあまり知らないんじゃないかと思いますので、改めて相談させていただけたらと思います。そろそろ時間が迫ってまいりました。団体との連携、地域住民の方との連携などディスカッションを進めてきたわけですが、本日のパネラーの方々は地域振興に関わる事業を長年にわたって展開してきて、いろいろな苦労も味わっていると思うんですね。いまと創設当時を比べて、どのように目に見える効果が挙がっているのか。あまり効果が挙がっていなければ何が原因なのか。そういったことを含めて、まとめに替えて２分程度ずつお話いただいて、その後、平川館長さんにコメンテーターとして感想をお聞きして、お開きにしていきたいと思います。それでは順番に佐藤さんからいきましょうか。

佐藤：それではまとめということで、今まで取り組んできた数々の例をお話しましたけれども、やはり難しいなあというのは過去にいくつかありまして、一番難しかったのは市民企画展。委員さんを公募して、そ

して市民の方を企画運営の中心に据えて展示をする。今から6年くらい前の話なんですけれども、非常にブームといいますか注目された手法でうちの館もそういう力を使ってやってみようということでやったんですけれども。そういくことに手を挙げてくる方たちというのは、結構こだわりを持った方が多い。なかなか話し合いの中でも、職員と市民の運営委員の方々のすり合わせが非常に難しいというのがあるんですね。結構いろんなことをおっしゃる方の中には、「私は学芸員の資格を持っているんだよ。」といことを熱弁されるんですけれども、実際にはそういうことを今まで経験として活かれたことはなかったんですけれども、やっぱりそういうプライドで話しをされてしまうとなかなか建設的な話しにならなくなってしまうんですね。ですから長期的な展望で付き合っていったり、ひとつの大きな企画展を対等な立場で運営していくというのは非常に難しいと感じました。ただ市民の力を活かすという点ではまだまだ気がつかないことがあるかと思ってますんで、常にアンテナは高くしてチャンスを見つければ、チャレンジしていくということを忘れずにやっていきたいと思います。

尾崎：我々の活動の場合は、地域振興の定義によると思うんですけれども、大きく二つに整理してお話をします。一つは何がしかの経済効果を伴うものという意味での地域振興。それからもう一つは、我々の活動地域は過疎地ですので、過疎の話ですね。過疎で人口が減らないような方向での影響を考えました。経済効果については、直接的で面白いなと思ったのは、先ほどのおばあちゃん畑の例ですが、これは地元のおばあちゃんたちが勝手に盛り上がって、おばあちゃんの畑ブランドの話しで非常に盛り上がっているわけです。非常に直接的な地域振興です。その他でも我々観察会だとかいろんな行事を地域で展開していますので、その形で集客することによって地元の県民の森ですとか、学校を目的にして運営しているところが集客増になっているという影響は出ている。それから「山みち展示」を他の場所でも鹿野山という場所でも展開して、その鹿野山という場所に人に来てもらってという形で実現していっている。それが地域振興の一例です。もう一つの過疎の方ですけれども、これはなかなか評価は難しいところなんですが、例えば私達の関係で言いますと、もうかれこれ7年間こういったことやってますと、小学生だった子供が大学生になっている。そうすると今東京の大学に通っているんですが、「自分はいずれこの地元のお祭りを守るためにここへ帰ってくる。」と宣言している大学生がいる。それは我々が関わったお陰でそうなったんだか判らないですが、少なくともそういうことを私達に語ってくれるという面では効果があったのかなと思います。あと私達が関わった小学校6年生が将来なりたいものというものを書くんですけれども、「将来博物館の学芸員になりたい」という子どもが何人かいる。本当になるかどうかはわかりませんけど、少なくとも博物館の学芸員を職業選択のひとつに考えてくれるのはすばらしいことだと思います。それがどう過疎と関係するか判りませんけど、その地域の自然や文化を面白がったり、それを大事なものとして集めて保存する研究するという我々の姿勢をきちんと子どもが見ていて、自分もそういうことをやりたいと思ってくれるというのは、大きい意味で人を育てるという意味で地域振興に繋がっていくのではないかと思います。

田原：私どものところは、このキャラバンをはじめとするアウトリーチ事業、これをやってこちらの博物館に返ってくるものと、逆に地域に提供するものという両方でお話しますと、その接点になるのが「担い手」の養成という考えになるわけですね。仮にキャラバンに行って喜んでもらうということがあったとしても、実際に地域研究員が増えるか、地域連携グループが組織できるかというと今、壁にあたっています。その理由はですね、博物館の近くでは増えていくことを考えるとやっぱり活動拠点がないということ。やっぱり活動拠点は重要だと考えております。それに対していくつか手を打ってみたんですね。地域担当という研究員を地域ごとに定めて、事業単位で考えずに個人が担当していくように替えたんです。けれどもこれがなかなか難しかった。なかなかそう簡単にはいかない。それから一方でどんどん予算がなくなってますので、地元からリクエストがあったところへ行くということを始めました。例えばホタルを活用して地域活性化したいというところへ行く。これは一時的にはそれなりに効果がある場合はあります。ただ関係づくりという点については、継続性に問題があります。ひとつの考え方・方法だと思いますので、そのあたりが今考えているところですね。最後に、非常に効果的な連携だなと今思っているのが、ボランティア同士の連携です。我々博物館ができないことをボランティア同士の連携がやっ

てくれる。これは考えようによっちゃ面白い展開につながるのかもしれないというふうに思っています。

勝山：我々今、田原さんが「担い手」とおっしゃいましたがそういうことだなと思います。やはりいろんな植物誌の調査とかもそうですし、ボランティアの活動もそうなんです。そういう中から「担い手」が育つと、その人から波及する。それは県立の博物館だけの話ではなくて、市町村の博物館、平塚市博さんは学芸員というと、さっき話しましたけど生物の学芸員一人に、あと歴史とか人文系の学芸員がいます。自然系に関して言うと、生物系が一人しかいない。その一人の学芸員が動物で、動物をカバーしていれば、植物がカバーできない。今、平塚市の博物館には動物系の方がいらっしゃるんですけれども植物がいない。植物不在なんですけども、植物誌の調査では動いています。それはだれがその担い手になっているのかといいますと、植物誌の2001年の時執筆者になってくれたような人達が、標本が入ってきたものを同定して、標本の整理のリーダーになって着々と進んでいます。植物の学芸員がいない、だけれども標本が入ってきている。それは厚木市の博物館でも同じです。同じ一人のボランティアが複数の館のボランティアもやっている。そういう形での連携が出来上がってきています。うちに来ているボランティアの方で、一人だけ異色な方がいて埼玉県の博物館でも（ボランティアを）やっていて、うちにも来ています。埼玉県の小さい博物館で、植物の学芸員がいないんで、（うちで）標本等を同定しているというところもあります。そういう活動を通じて「担い手」を育てられればいいなと。そうでなければなかなか「担い手」を育てるのは難しい。やはり大きい事業があれば、なるべくそこに参加していただいてレベルアップしていく。県立レベルの博物館に標本の蓄積とか文献なんかの蓄積があり、きちっと指導者がいて「担い手」を育てていけば、そういうふうに波及していくのかなと考えています。

平川：今日午前・午後と事例報告を各館の方からいただいて、改めてそれぞれの館の学芸員・研究員の方が本当に持てる力を十二分に発揮していらっしゃることがうかがえました。なおかつそれでも今社会的に美術館・博物館に対する圧力というものがあって必ず言われる言葉が、入館者数、そして費用対効果というふたつの言葉で締め上げられている。そういった点では、まず私の先ほど提案したような、これまでの博物館に対する評価そのもののシステムを変えていかなければいけないじゃないかというふうに思います。館の活動というのは、先ほどの千葉県の中央博の構想の山のフィールド・ミュージアムでわかりますように、館そのものに来た人だけの問題ではないわけで、それから兵庫県の例もこれはキャラバンとして全県下を隈なく廻って、まあ兵庫の場合、知事さんが締めているといったことを報告されているわけです。これからの博物館が地域に持っている役割というのはそういう多様性があるということを、もっと直接行政なりに、あるいは学者なりに対して訴えていくことにある。それが一つの大きな手段ではないかなと思います。それからそれぞれの地域にとって一番大切なものは何なのかといった価値観を明確にし、私たち博物館に関わるものがしっかりと訴えていくことにある。国立の博物館の立場であれば、日本が今何をなすべきかということを、そういうメッセージを博物館として堂々と出してゆく必要がありますし、それぞれの地域の博物館がそれぞれの地域にとって一番、現在及びこれから大事にしなければならない事を、博物館がパートナーとしてコンセプトを示していく必要がある。経済を振興するために必要なのも、やはりその地域に眠っている資源、言い変えれば自然環境、そして地域に根ざした地道な資料から積み上げていく歴史と文化というものしかないと考えております。そういう面では一つ大きな人々の思想、午前中ちょっと佐久間館長から質問がありました時に、私は「思想」だと申し上げたわけはそういう意味なんです。これは神奈川県博さんが館の名称のいわれで『素敵な宇宙船地球号』というのを使われましたが、これはテレビ朝日で長年環境問題を扱っている番組名ですが、私が以前、文部省の科学番組に出演して、今何で人文学かということを話した時に、実はそこで引用したのがその『素敵な宇宙船地球号』で放映された「高層ビルが渡り鳥の敵」という番組の夜の街の救出作戦なのです。その番組は、1999年のものなんですけれども、これはカナダのトロントの例を上げて、夜飛来する渡り鳥が夜間にビルの照明によってそのビルに衝突する。それを１年間数えてみると、１年に２千羽ぐらいビルの谷間に小鳥の死骸がころがっている。そういう現状を民間の方々が立ち上がって救出するといった時に、真っ先にカナダのトロントの大きな代表的な銀行の頭取が、「自分に今できることは何なのか」と電話で申し出てきた。「電気を消す。つまり照明を

落とすことですか」とたずねた。この思想ですね。これで実際には、トロントの夜間の照明が一斉に落とされていって、いつもどおりに渡り鳥が飛来するようになった。トロントの環境が守られた。これはトロントにとって鳥の救出作戦と同時に常に保たれていなければいけない、やはりトロントの自然環境というものを守ることがトロント市民にとってのより良い環境であるという、そういう思想に支えられた行為であると私は理解しています。それに対して現在の東京の再開発というか開発は、まったく江戸時代以来の歴史的な景観を無視したものです。山の手と下町の非常に巧みな自然環境を利用した街づくりというものが、ほとんど無視された形で次々にある一部の開発業者によって進められ、都市計画そのものがまったく都民にも一般にも示されない。まだどんどん開発が進んでいっていることのギャップは一体どこにあるのかと非常に深刻に考え、そのためにはやはり私達がもっと地域の歴史・文化ということをきちっと調査・研究して、それを社会へ発信していく必要があります。それによって、街づくりをするといった時に、都市工学の専門家だけでなく、歴史学者が入っていって、どの街ももっている特殊な構造というものを認識してもらいつつ、都市計画をやっていく必要があるのではないかと思います。その点でも、やはりそれぞれの地域にとって一番大事なものは何なのかということを博物館が中心になって発信していくことが大事です。民間の小さな博物館でも私は同じと思うんですね。「米屋」さんが長年羊羹を作ってきた。ようするに、その長い歴史が千葉の風土を活かしてきたりっぱな産業だということを、伝えていかなければいけないという意味でも同じことがいえるんじゃないかなと思います。またそういう面でも私自身も博物館に関わる一人として、これからも初心を忘れずにやっていきたいなと思います。今日４名の方の意欲的な報告を聞きながら思いました。

それから最後に、一つは館員一人一人が経営者であり運営者なんですね。これは外からみた時に来館者あるいは一般市民からみた時、やはり博物館のすべての館員がその博物館の責任者というふうに実際見られているということを、山梨の県立博物館で最初に館員にも言った事があるんです。実際そうなんです。もう展示交流員の一人が受付に居て、その人そのものが館を代表しているんです。あるいは委託契約だけれども守衛さんたちがある部署に立っている。外からみたらその人がりっぱに館を運営している、そういう意識で見られているということです。このことは自覚する必要があるだろうと。最終的には無論館長が負わなければいけない。これは責任逃れで言っているんではないです。そういうふうにやはり見られているということを自覚する必要がある。今日お話になった４名の方はそういう面で立派に館のそれぞれの活動を背負っているということです。外にいったら館の代表として活動していると見られているわけです。全員がそうなった時にもっともっと大きな力になっていくんではないかなと私は思います。今日は本当にいい勉強させていただきました。そのことを感謝して終わらせていただきます。ありがとうございました。

佐久間：私が最後になって興ざめなことをいっては申し訳ないので、私の方は一切コメントは差し控えさせていただきます。いずれにしても本日のシンポジウム、パネルディスカッション中心ですが、千葉県博物館協会の研究紀要の中に収録させていただきます。平川館長の基調講演、パネラーの方々の事例報告、それから質問させていただいたことへのコメントも含めて公開したいと思っています。

最初の段階でも言いましたが、千葉県博物館協会では新たに地域振興委員会を設置して、文部科学省の図書館・博物館における地域振興の拠点づくりの一環としての博物館ネットワーク構築推進事業として、千葉県文化財救済ネットワークシステム推進事業を予算規模約250万円で実施中です。さらに地域振興委員会では、５月18日の国際博物館の日にも、千葉県博物館協会を挙げて、それぞれの館が冠事業などを展開して盛り上げていくことを考えています。改めて、各館・園の方に連絡させていただきます。千葉県博物館協会では、今回を契機に各館・園が一緒になって、いろいろな事業を展開していきたいと思っています。これにて、本日のシンポジウムとパネルディスカッションを終わりにいたします。

司会の林さんから、早くしろ早くしろと言われているようなので、これにて私の話は終わりにさせていただきます。皆さん、どうも本日一日ありがとうございました。

改めて本日お越しいただいた平川館長はじめパネラーの方々に拍手をお願いいたします。

（会場満座の拍手）

林：それでは今日はありがとうございました。

千葉県博物館協会加盟館園一覧（平成21年度版）

No.	館　園　名	郵便番号	住　　所	TEL	FAX
1	我孫子市鳥の博物館	270-1145	我孫子市高野山234-3	04-7185-2212	04-7185-0639
2	いすみ市郷土資料館	298-0124	いすみ市弥正93-1	0470-86-3708	0470-86-3708
3	市川市芳澤ガーデンギャラリー	272-0826	市川市真間5-1-8	047-374-7687	047-374-2588
4	市原市水と彫刻の丘	290-0554	市原市不入75-1	0436-98-1525	0436-98-1521
5	稲毛民間航空記念館	261-0003	千葉市美浜区高浜7-2-2	043-277-9000	043-277-9000
6	犬吠埼マリンパーク	288-0012	銚子市犬吠埼9575-1	0479-24-0451	0479-24-0449
7	伊能忠敬記念館	287-0003	香取市佐原イ1722-1	0478-54-1118	0478-54-3649
8	印旛村歴史民俗資料館	270-1616	印旛郡印旛村岩戸1742	0476-99-0002	0476-99-2223
9	宇奈加美三千年ノ館、資料館	289-2516	旭市ロ-834	0479-62-0110	0479-62-0250
10	浦安市郷土博物館	279-0004	浦安市猫実1-2-7	047-305-4300	047-305-7744
11	大原幽学記念館	289-0502	旭市長部345-2	0479-68-4933	0479-68-4933
12	御宿町歴史民俗資料館	299-5102	夷隅郡御宿町久保2200	0470-68-4311	0470-68-7130
13	海岸美術館	295-0014	南房総市千倉町川戸柏尾550	0470-44-2611	0470-44-4439
14	風の資料館「航風館」	299-4403	長生郡睦沢町上市場667-3	0475-44-2101	0475-44-2101
15	かつうら民俗資料館	299-5272	勝浦市貝掛391	0470-76-3038	0470-76-4129
16	香取神宮宝物館	287-0017	香取市香取1697	0478-57-3211	0478-57-3214
17	鹿野山神野寺宝物拝観所	292-1155	君津市鹿野山324-1	0439-37-2351	0439-37-2352
18	鎌ヶ谷市郷土資料館	273-0124	鎌ヶ谷市中央1-8-31	047-445-1030	047-443-4502
19	鴨川シーワールド	296-0041	鴨川市東町1464-18	04-7092-2121	04-7093-3084
20	鴨川市郷土資料館	296-0001	鴨川市横渚1401-6	04-7093-3800	04-7093-1101
21	川村記念美術館	285-8505	佐倉市坂戸631	043-498-2131	043-498-2139
22	木更津市郷土博物館　金のすず	292-0044	木更津市太田2-16-2	0438-23-0011	0438-23-2230
23	君津市立久留里城址資料館	292-0422	君津市久留里字内山	0439-27-3478	0439-27-3452
24	航空科学博物館	289-1608	山武郡芝山町岩山111-3	0479-78-0557	0479-78-0560
25	国際上総埴生美術館	299-4403	長生郡睦沢町上市場2416-5	0475-44-2006	0475-44-2006
26	国立歴史民俗博物館	285-8507	佐倉市城内町117	043-486-0123	043-486-4209
27	佐倉市立美術館	285-0023	佐倉市新町210	043-485-7851	043-485-9892
28	佐藤佐太郎記念福富雷童記念江畑美術館	289-2612	旭市蛇園字出清水2516	0479-55-2918	0479-55-2110
29	山武市歴史民俗資料館	289-1324	山武市殿台343-2	0475-82-2842	0475-82-2842
30	芝山町立芝山古墳・はにわ博物館	289-1619	山武郡芝山町芝山438-1	0479-77-1828	0479-77-2969
31	城西国際大学水田美術館	283-8555	東金市求名1	0475-53-2562	0475-55-3265
32	白浜海洋美術館	295-0102	南房総市白浜町白浜628-1	0470-38-4551	0470-38-4551
33	市立市川考古博物館	272-0837	市川市堀之内2-26-1	047-373-2202	047-373-2205
34	市立市川自然博物館	272-0801	市川市大町284	047-339-0477	047-339-1210
35	市立市川歴史博物館	272-0837	市川市堀之内2-27-1	047-373-6351	047-373-6352
36	白井市郷土資料館	270-1422	白井市復1148-8	047-492-1124	047-492-8030
37	宗吾霊宝殿・宗吾御一代記館	286-0004	成田市宗吾1-558	0476-27-3131	0476-27-3135
38	袖ヶ浦市郷土博物館	299-0255	袖ヶ浦市下新田1133	0438-63-0811	0438-63-3693
39	館山市立博物館	294-0036	館山市館山351-2	0470-23-5212	0470-23-5213
40	千葉県南房パラダイス	294-0224	館山市藤原1495	0470-28-1511	0470-28-1520
41	千葉県酪農のさと	299-2507	南房総市大井686	0470-46-8181	0470-46-8182

No.	館　園　名	郵便番号	住　　所	TEL	FAX
42	千葉県立現代産業科学館	272-0015	市川市鬼高1-1-3	047-379-2000	047-379-2221
43	千葉県立関宿城博物館	270-0201	野田市関宿三軒家143-4	04-7196-1400	04-7196-3737
44	千葉県立中央博物館	260-8682	千葉市中央区青葉町955-2	043-265-3111	043-266-2481
45	千葉県立美術館	260-0024	千葉市中央区中央港1-10-1	043-242-8311	043-241-7880
46	千葉県立房総のむら	270-1506	印旛郡栄町竜角寺1028	0476-95-3333	0476-95-3330
47	千葉市科学館	260-0013	千葉市中央区中央4-5-1	043-308-0511	043-308-0520
48	千葉市美術館	260-8733	千葉市中央区中央3-10-8	043-221-2311	043-221-2316
49	千葉市立加曽利貝塚博物館	264-0022	千葉市若葉区桜木町163	043-231-0129	043-231-4986
50	千葉市立郷土博物館	260-0856	千葉市中央区亥鼻1-6-1	043-222-8231	043-225-7106
51	長南町郷土資料館	297-0121	長生郡長南町長南2127- 1	0475-46-1194	0475-46-1194
52	塚本美術館	285-0024	佐倉市裏新町1-4	043-486-7097	043-222-7021
53	ＴＥＰＣＯ新エネルギーパーク	293-0011	富津市新富25	0439-87-9191	0439-87-9190
54	流山市立博物館	270-0176	流山市加1丁目1225-6	04-7159-3434	04-7159-9998
55	成田山書道美術館	286-0023	成田市成田640	0476-24-0774	0476-23-2218
56	成田山霊光館	286-0021	成田市土屋238	0476-22-0234	0476-22-0242
57	成田市三里塚御料牧場記念館	286-0116	成田市三里塚御料1-34	0476-35-0442	0476-35-0442
58	成田市下総歴史民俗資料館	289-0108	成田市高岡1500	0476-96-0080	0476-96-0080
59	成田羊羹資料館	286-0032	成田市上町500	0476-22-2266	0476-22-1661
60	野田市郷土博物館	278-0037	野田市野田370	04-7124-6851	04-7124-6851
61	野田市立中央小学校教育史料館	278-0037	野田市野田611	04-7122-2116	04-7122-2117
62	菱川師宣記念館	299-1908	安房郡鋸南町吉浜516	0470-55-4061	0470-55-1585
63	財団法人　藤崎牧士史料館	286-0203	印旛郡富里市久能583	0476-92-1258	
64	ふなばしアンデルセン公園　子ども美術館	274-0054	船橋市金堀町525	047-457-6661	047-457-7584
65	船橋市郷土資料館	274-0077	船橋市薬円台4-25-19	047-465-9680	047-467-1399
66	船橋市飛ノ台史跡公園博物館	273-0021	船橋市海神4-27-2	047-495-1325	047-435-7450
67	平成美術館	274-0824	船橋市前原東1-1-1	047-473-1210	047-476-2720
68	房總浮世繪美術館	297-0222	長生郡長柄町大庭172	0475-35-2001	0475-35-2001
69	麻雀博物館	299-4502	いすみ市岬町中原1-2	0470-87-8886	0470-87-8806
70	松戸市立博物館	270-2252	松戸市千駄堀671	047-384-8181	047-384-8194
71	松山庭園美術館	289-2152	匝瑳市松山630	0479-79-0091	0479-73-6716
72	睦沢町立歴史民俗資料館	299-4413	長生郡睦沢町上之郷1654-1	0475-44-0290	0475-44-0213
73	METAL ART MUSEUM HIKARINOTANI	270-1603	印旛郡印旛村吉高2465	0476-98-3151	0476-98-3156
74	茂原市立美術館・郷土資料館	297-0029	茂原市高師1345-1	0475-26-2131	0475-26-2132
75	八千代市立郷土博物館	276-0028	八千代市村上1170-2	047-484-9011	047-482-9041
76	夢紫美術館	289-0313	香取市小見川581	0478-83-1089	0478-83-1092
77	吉澤野球博物館	273-0035	船橋市本中山1-6-10	047-334-3675	047-334-8808
78	歴史の里　芝山ミューゼアム	289-1619	山武郡芝山町芝山298	0479-77-0004	0479-77-1393
79	和洋女子大学文化資料館	272-0827	市川市国府台2-3-1	047-371-2494	047-371-2494
80	近藤　　正（賛助会員）	283-0812	東金市福俵470	0475-55-0543	
	千葉県博物館協会　事務局	260-8682	千葉市中央区青葉町955-2 千葉県立中央博物館内	043-265-3111	043-266-2481

MUSEUMちば　第40・41号
2010年3月26日

発　行　千葉県博物館協会
〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2
千葉県立中央博物館内
TEL 043(265)3111
http://www.chiba-web.com/chibahaku/index.html
編　集　千葉県博物館協会調査研究委員会
印　刷　有限会社 エーワンネットワーク
船橋市日の出2-2-13　第2ナカイチビル102